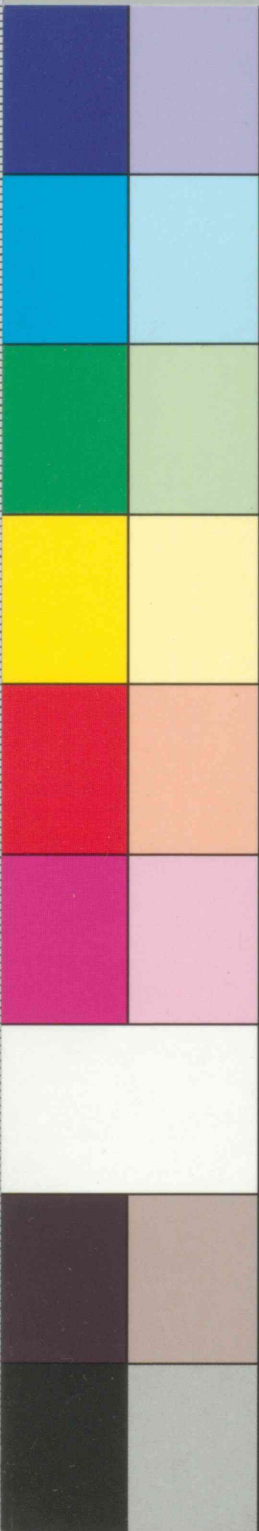


子女國文教

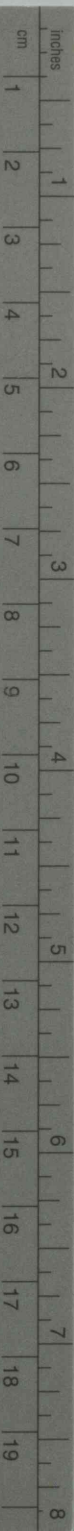
375.9
Sa20
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42147

教科書文庫

4
810
42-1917
26000 26428

76



資料室

375.9
Sazo

教育部檢定
高等女子學校國語教科書

文學博士佐々政一編

卷七

女子國文教科書

東京 光風館藏版

廣島大學
圖書印



子女國文教科書修正六版卷七

目次

一	我が國語……………	一頁
二	文を作るは難きことなし……………	七
三	山紫水明……………	三
四	和歌の感興……………	一五
五	歌詠む心得……………	一九
六	我が家の富……………	三五
七	蕨……………	三九

目次

八 思ひ出 三三

九 音 樂 三五

一〇 十八樓の記 四一

一一 佐渡が島 四三

一二 人工の美と自然の美上 四九

一三 人工の美と自然の美下 五四

一四 をさな兒 五九

一五 孟 母 六二

一六 息女に教訓す 六五

一七 柔和なる返事 七一

一八 質 素 七四

一九 當意即妙 八一

二〇 井上通女史 八七

二一 渡邊崋山の立志 九七

二二 雨の興 一〇四

二三 百花譜 一〇九

二四 櫻 諍 一一三

二五 四季の月 一二八

二六 熊王の發心 一二九

二七 武士のなさけ 一三五

二八 如意輪堂 一三三

二九 讀書 一三九

三〇 能損の道 一四三

目次終



女子國文教科書修正六版卷七

一 我が國語

敷島のやまとの國は言靈の

たすくる國ぞ、まさきくありこそ。

*榜本人磨。

歌聖人磨が此の一首は、傳説的に深く我が國民に國語を尊重する心を起させて來たものであるが、今やわが帝國が世界の一等国として、東洋に雄飛する時勢に遭逢して、益、我が國語の繁榮を願ふ情が湧來るのは、當然の事であらう。

一國語がその國家の勢力の上に大關係のある事は、今更に言ふまでもない。試にかの英國を見よ。その海軍、その航海業、その商工業のみならず、その言語・文學は世界に大勢力をもつて居る。世界の通商貿易は過半、英語を以て行はれてゐる。文明國の都市には英文學を研究してゐないところはない。たゞその言語・文學の勢力だけを觀ても、英國の偉大を感じざるを得ぬではないか。

嘗て或處で支那の留學生と行きあつたことがある。彼等は日本語を話し、日本服をつけ、日本料理をたべて居た。自分は暫くは彼等が支那人であることに氣づかなかつた。ところが彼等は、我が國の大家が漢文學中の一句を書いた額を見

て、「これも支那のおかげだ」とさゝやいた。そのさゝやきを聞いて、自分は深い感慨にうたれざるを得なかつた。彼等は日本人に賞美されてゐる自國の古文學を眼前に見て、その祖國が他の國民に及ぼした勢力を自覺し、直に自尊心を起し來つたのである。これは尤もな事である。歐米の好事家が日本服を著てゐるのを見てさへも、何となく我等は好い心持がする。況や他國の大家の精神に刻まれた、祖國の文物の勢力を觀れば、實に多大の自尊心を起すべき筈である。顧みれば、我が國に支那の古文學を傳へたのは随分古い事であるのに、その古文學は偉大な勢力を我が國に存續して、故國の勢力は衰退しても、文學の力は依然として日本人の頭腦の

一部を支配してゐる。我等は言語文學の影響が強大で長久であることを認め、かつ正直に、いはゆる「おかげ」を謝せざるを得ぬ。

「おかげ」を謝するとともに、我等は何時までも他國の「おかげ」を蒙つてゐることに満足することは出来ぬ。我等は我が國語の勢力を擴大して、他國民に「おかげ」を蒙らせねばならぬ。凡そ自國語を尊ぶことは、何人も主觀的に然らざるを得ぬ。自國語を尊ばないものは愛國者でない。然るに幸にして我が國語は、之を客觀的に見ても、已に世界に於て重んぜらるべき資格を持つてゐることが認められる。

世界の諸語族の中で最も重要なものは、印度語や西洋諸國語

(-) Ural-altaic.

(=) Finland.
(露の北西隅)

(三) Hungary.

などの屬する印度歐羅巴語族、支那語や安南語や暹羅語などの屬する印度支那語族、及び我が國語などが屬するといふウラルアルタイ語族であらう。ウラルアルタイ語族は、我が日本列島、朝鮮、滿洲、蒙古、シベリヤ、中央亞細亞から、飛びはなれて歐羅巴のトルコ、フィンランド、ハンガリーにまで擴がつてゐる。この語族の中で、特に我が國語には、祝詞や古事記や萬葉集のやうな立派な文學が上古から現れてゐる。中古・近古・近世の間に於いては、物語、戰記、謠曲、淨瑠璃、小説、和歌、俳諧などの文學が榮えてゐる。文學のにぎやかなこと、世界の何れの國に對しても決して遜色はあるまい。且つ我が古今の文學は、世界の最も優秀なる支那、印度及び西洋の三大

(一) Inflected language.
(二) Agglutinative language.

文明を吸収し、之を日本思想に融和させて、こゝに特殊なる文學を成してゐる。加之、我が國語は語彙も豊富で、語格も整つて、よく綿密なる思想を發表するに適し、曲尾語たる西洋諸國語に對して、立派なる添著語（添）の代表者である。この國語を日々用ひてゐる人口は、内地人ばかりでも實に五千幾百萬、即ち世界總ての人口の凡そ三十分の一以上といふべき大きな數である。

我等は斯様に我が國語の尊ぶべき資格を認めると同時に、益、その勢力を發達させることを怠つてはならぬ。我が國語は現に外國に向つて發展してゐないではないが、我が國民が漢文や英語、獨逸語におけるが如く、深く我が國語の「お

げ」を蒙つてゐる國民は、殘念ながらまだ外國には認め得ない。我が東亞新興の國民は、須く大いに國語を尊重し、且つこれが愛護發展に努力せねばならぬ。

(日下部重太郎「現代の國語」に據る)

二 文を作るは難きことなし

文を作るは難きことなし。心のまゝに文を連ぬれば、文は自らにして成るものなればなり。想を述べ、事を敘するといふ二いろの外に文といふものはなし。想を述ぶるの文は、わが心に想だにあらば、それを其のまゝに書連ねて、文そこに成るわけなり。想なくて想を述ぶる文を成さんとせんには、そ

れは火の無きに煙をあげんとするが如くなれば、誠に難くもあるべし。想だにあらば、それを書現さんに難かるべきいはれなし。事を敘する文も亦然り。敘すべき事わが心の上に明かならんには、それをそのまゝに寫し出す時、文直にそこに成るべきなり。難かるべきいはれ更にあるべからず。若し敘すべき事なきに、事を敘する文を作らんとせば、それは空しき鍋より何物かを出して、皿に盛らんとするが如くなれば、實に難くもあるべし。敘すべき事だにあらば、それを書現さんに難かるべきいはれなからん。述べんとする想、敘せんとする事あらば、唯心のまゝに書現すべし、文は自らにしてそこに成るべきなり。

述べんとする想、敘せんとする事は、千萬石の水ほどもあれど、筆の先には露ばかりも迸り出でず、誠に文は能くし難しといふ人あり。その人誠にしか思ひて、しかいふにもあらん。されどそれは事實にはあらず。誠に千萬石の水あらば、それを湛へて迸り出でざらしめんことこそ難かるべけれ。蟻の穴より隄も破るゝ道理なれば、その水のいかで迸り出でざることあらん。水にはあらで、未だ水とならざる雲の如きもの、胸中に氤氳としてたなびけるなるべく、誠に千萬石の水の湛へられんには、迸り出でんこと疑あるべからず。古より文筆の人ならぬ人の文章の、神采奕々、風趣津々、人をして或は襟を正し、或は涙を落し、或は奮ひ、或は悦び、或は深

省を發し、或は手の舞ひ、足の踏むを覺えざらしむるものあり。それ等こそ眞に胸中千萬石の水、自らにして筆端に迸り、楮表に溢れたるものとはいふべけれ。愛國の忠臣、思親の孝子、身を忘れて道の爲にせる哲人などの文章は、皆それなり。惻々人を動かす文は、區々たる使字の巧、用語の麗なるより來らずと人の言ふも、この間の消息を語れるなり。法然親鸞の文、日蓮向阿の文、又溯りて傳教弘法の文、皆人を動かすものあるは、文の成る前に既に文の在るありて、而して後に文自ら成ればなり。今の人も動かし、吾が胸中に文ありて、しかも筆下に文なしといふは、誠に僭越に近し。文を成さんとする時、誠に文と成るべきもの、心の中に乏しければこそ、

(一) 淨土宗開祖。(一七
三—一七七)
(二) 眞宗開祖。(一三
一—一九三)
(三) 法華宗開祖。(一
八—一九三)
(四) 淨土宗高僧。(一
一九五)
(五) 最澄。(一四七—一
八二)
(六) 空海。(一四三—一
九五)

文を作りわづらふなれ。若し述べんとする想、敘せんとする事のあるあらば、直にそのまゝに筆を走らせて、しかも文自ら宜しからん。よく省みてあきらめ知るべし。雲未だ凝らざる時、徒に空中に漂ふ。雨已に成りぬれば、なか地上に墜ちざらん。多くの人の述べたき想も、敘したき事も無きにはあらねど、文の能くし難きを如何せんと言ふは當らず。その人の想といへるもの未だ想といふ可からず、その人の事といへるもの未だ事といふに足らずして、想も事も總て朦朧曖昧にして、宛も雲の空中に漂へるが如く、唯その心の上にとりとめたる様もなく、明かなる色もなく、迷ひたなびけるに過ぎざるより、これに形を與へ、姿を賦して、

二 文を作るは難きことなし

二

文といふものとするに臨みては、如何にとも扱ひ難く、捌き難きわけなり。こゝの光景を能く考へ省みて、我が文を作りかぬる所以の源を悟り得れば、やがて文といふものを成すべき道の坦々として砥の如く平かに、不思議も、手づまも、祕密もなきことを知るを得て、そこより一日々々に筆の力の自在は増すべし。(幸田露伴)

金言(一)

子曰、辭達而已矣。

曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。

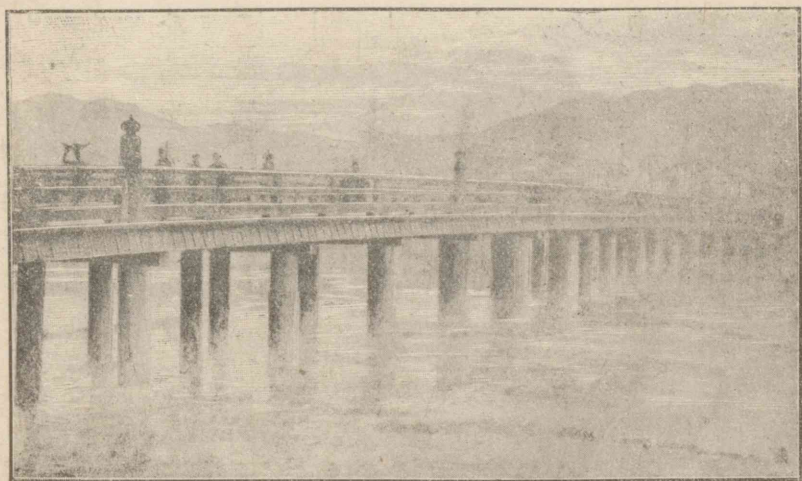
三 山紫水明

山紫水明の語はよく京都の景色を言表はせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むこと殊に濃かなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の到るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりく、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあリ。電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散す。波か、雷か、世界はただ一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて、凄じかりき。かくのごとく壯絶なる景は、我が數年の滯留中、遂に京都にては見

(一) 京都市、三條以南をいふ。
(二) 京都大學の所在地。

(三) 加茂川に架す、長さ六十三間。



京 都 三 條 大 橋

ることを得ず。
されど下京より吉田に通ひたる朝なくの景色の、今も恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つく彼方へくと薄くなりて、向ふに寝たる東山は、あるかなきかの夢よりいまだ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る處女の姿は隠れて、聲

(四) 山城國宇治郡にあり、京都の東南に方る。

(五) 春の部、讀人不知。

ぞまづ朝靄を漏來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。(藤岡作太郎—國文學全史)

四 和歌の感興

古今集の歌は、詞すなほに、餘情ありて、多くは一唱三歎の價あり。

百千鳥さへづる春はものごと

春の部、凡河内
男恒。

雑の部、在原業
平。

雑の部、在原業
平。

此の歌を吟ずれば、老人懐舊の情を感じずべし。

春の夜のやみはあやなし、梅の花の

色こそ見えね、香やはかくる。

此の歌を吟ずれば、有徳掙ふべからずの誠を感じずべし。

世の中にさらぬ別のなくもがな。

千代もと祈る人の子のため。

此の歌を吟ずれば、「孝子愛親」の情を感じずべし。

忘れては夢かとぞ思ふ、思ひきや、

雪ふみわけてきみを見むとは。

此の歌を吟ずれば、「君子不忘故舊」の情を感じずべし。

雪ふみわけてきみを見むとは。

金槐集。



室鳩巢集

此の類外にもなほ多かるべし。古今集以後八代集に至りては、あげて數ふべからず。中に翁が常に好みて吟ずる歌一首

あり。それは實朝の歌なり。

武士の矢竝つくるふ

籠手の上に

あられたばしる

那須の篠原。

此の歌を定家卿評して、「鬼を

とりひしぐ體」といはれたるも、げにと覺えて、勇壯をもてす

ぐれたる歌なり。外には此の體の歌多く見えず。

さて春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、たゞ其の

八代集
後撰
拾遺
金草
新古今
古今和歌集
あはれ
さよふ
さよふ
さよふ

梅の
春の部、凡河内
男恒。

雑の部、在原業
平。

室鳩巢集
武士の矢竝つくるふ
籠手の上に
あられたばしる
那須の篠原。

(一) 古今集春の部、
紀友則。

(二) 新古今集夏の部、
藤原良經。

(三) 新古今集夏の部、
源賴政。

(四) 金葉集秋の部、
源經信。

まゝに寫し取りて、さながら見るやうにあるは、かの詞つゞ
き巧に、よくいひかなへたりと見ゆるよりは感深うして棄
てがたく覺ゆ。

ひさかたの光のどけき春の日に、

しづごゝろなく花の散るらむ。

うちしめりあやめぞかをる、郭公

鳴くやさつきの雨のゆふぐれ。

庭の面はまだかわかぬに、夕立の

そらさりげなく出づる月かな。

ゆふされば門田の稲葉音づれて、

あしのまるやに秋かぜぞ吹く。

(五) 新古今集秋の部、
藤原顯輔。

(六) 新古今集冬の部、
藤原定家。

秋風にたなびく雲のたえまより

もれ出づる月の影のさやけさ。

駒とめて袖うちはらふ蔭もなし、

佐野のわたりの雪のゆふぐれ。

これ等の歌、いづれも其の景色を寫して、さながら目に見る
が如し。折にふれて之を歌はんには、襟懷を清くし、塵想もけ
ぬべし。西行は、わが佛法は倭歌によりて進む、といへり。わが
ともがらも、吟詠を助け性情を養ふには便りなきにあらず。
倭歌の捨て難きは實にこゝにあるなり。(室鳩巢—駿臺雜話)

五 歌詠む心得

歌を詠む時の有様、どういふ風にして、どういふ時に詠むかといふことは、人々によつて様々である。古來の名家についてもそれ〴〵言傳へられて居る。

千載集の撰者。
(一七四—一八六四)

俊成は古い淨衣を著て正しく坐り、桐火桶を抱へながら心を凝して詠んだ。これは、桐火桶の體の名とともに有名な話。其の子の定家は我が家で詠む時には、南面の障子を開かせて遠く望み、衣冠正しく、端坐して詠んだ。それは、平生心を清く正しくして詠み習はないと、高貴の御前へ出て詠む時心が落著かず、詠み誤るからの用意。

新古今集、新勅
選集の撰者。(一八
三—一九〇)

西行は始終道を歩き乍ら考へた。或時、後鳥羽院が水無瀬の離宮に、時の歌人數人を召された。西行も其の一人であつて、

女流歌人、拾遺
集時代の人。

當座の題を賜はつたが如何にも詠みづらさうに苦吟の様子で、差上げた歌も、いつもの歌ほどよくなかつた。次の當座題を賜はつた時、院の「西行よ、庭を歩いて見よ」との御詞に、直に御苑の内を歩いて、座に還つて差上げた歌は秀逸の作であつた。かく西行は歩きながらでなければ詠めなかつたといふ、作り話のやうな逸話が傳へられてゐる。

和泉式部は沈思熟考して詠み、殊に大切の時には顔を懷にさし入れるほどにして詠んだ。

俊成の女は、秀逸の歌を詠まうといふ時には、先づ日頃から心懸けて、いろ〴〵の集を繰返して讀み、いよ〴〵となればすべてとり片付け、燈臺に火を幽かにもし、靜かにして人

藤原兼家の妻。

後鳥羽天皇の宮女、歌人。

を近付けずに詠んだ。右大將道綱の母も、同様に燈火をそむけて暗くして、眼を閉ぢて詠んだ。

宮内卿は多くの冊子などを竝べて、火も近く明るくともして机に向ひ、片端から書きつけては考へた。

これらを知りて、それ〴〵歌人の歌を讀味つて見ると、其の態度と作品との間に、自ら相似通つて居るものがあつて、とり〴〵に面白い。俊成・定家の典雅な態度、西行の脱俗、式部の沈痛、俊成の女の幽麗、宮内卿の纖巧等、いづれも其の態度にふさはしい。

平安朝の半ば以後、新古今集時代を代表するこれら歌人の態度は、以上の如く傳へられて居るが、それはさておき、初め

て歌の道に入る人が、歌を詠む時の心構へはどうするのが善いかといふに、これは勿論人それ〴〵の好にあるので、決して一様には言へないが、少し自分の考を言つて見たい。

俊成・定家のは自ら大宮人の心得、西行のは歌をよんで旅行した世捨人の心得であるから、我々が必ずしも取つて手本にするといふ様を必要はないが、我々には、まづ第一に心の静まつた時を選んで詠むのがよい。定まつた仕事のある人ならば、朝起きて仕事にかゝる前とか、夜仕事を終へてやすむ前とか、しばしの閒、心を塵外に馳せて思を凝すもよい。だが又事々しく時間を定めずに、何時でも、心の静かな一寸の閒を選んで詠むのもよからう。せはしい仕事のあひ閒とか、

電車内とか、車の上とか、往來とかでも、割合によい歌が出来ることもあるものである。随つて、いづれの時を問はず、心を集注するといふ工夫が必要である。一寸の閒に、心を歌といふものに集めて、何にも妨げられず、全く歌の天地、歌の世界に入りこんで了ふといふことが必要である。此の準備さへ出来て居れば、休息の時でも、脳がはげしく働いて居る時でも、一寸のあひまに詠む事が出来る。

かういふ風になるには、どうしても始終詠み試みて、早く考へ、自由に詠む習慣を養つておかねばならぬ。作例にすがつて、いつも参考書によらねばよめぬ、といふやうな状態から早く離れて了はねばならぬ。さうなるには、つまり多く作ら

ねばならぬ。前に述べた、心を集注するといふやうな習慣も、この多く作る閒に養成せられて行くのである。支那の文章家も、文章を學ぶには、多く読み、多く商量し、多く作れと勧めて居る。中にも、多く作るほど必要な事は無い。

但し初學者は無暗に多作するのみでなく、前に述べたやうな、詠歌の際に必要な習慣を養成しようといふ考で、多く作るをよしとする。(佐々木信綱の文による)

六 我が家の富

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か言ふ、狭くして且つ陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容る可く、庭狭しと雖も、仰いで碧

空を望む可し。

月日は此處にも照れば、四季も來り、風・雨・雪・霞かはるゝ、到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散す。鄰家に花樹多し。風に隨ひて、飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに、滿庭花の筵を敷く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭々として、些の邪なく、我が如く直かれと教ふるに似たり。これと手水鉢の側なる八角金盤とは、葉廣うして我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起るなり。

つくづくばふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、たゞ一株前の家主の植残したる黄菊も咲きいづ。名苑の花美しと云ふとも、秋のあ

*梁田蛻巖。明石藩の儒者。(明治三十一)

はれ、閑寂の趣は却て我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁なりせば、「獨憐細菊近荆扉」とや吟ぜまし。恥づらくは海内文章落布衣」といふべき身にあらざること。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして樹は金よりも黄なり。風の風起れば、其の葉翩々として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ちそひて、寸金と人は云ふなる錦を、我は庭に敷きつめつ。木の葉落ちつくしては流石に淋しげなるも、日影月影愈多くなりて、空を見、星を見るに障なきは嬉し。

(徳富蘆花―自然と人生)

金言(二)

飯疏食、飲水、曲肱、枕之、樂亦在於其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。

立身淵

七 蕨

「右左しれぬ蕨の拳かな。とうたはれて、早蕨の綿を被ぎて萌出でたるは、音に優しき手に摘まれて都への土産とせらるるのみならず、畫家の爲には丹青の材を供し、工藝家の爲には圖案の供給をなして、その用盡くる事を知らず。根よりは澱粉をとりて蕨粉となし、揉碎したる根はこれを縋ひて索となすに、頗る水に耐ふるを以て土木の料となす。此の草は

拳の肥腕
近いすせ
かな

羊齒科の宿根草にして、其の根は縦横に地中を匍匐し、地を
抽きて處々に葉を生ず。其の形の優美なるは以て詩家の好
題目たるべし。金葉集に、

山里は、野邊のさわらび萌えいづる

折にのみこそ人は訪ひけれ。

と詠まれたる如く、主に柴山の半腹より、高原の此處彼處に
生ずるものにして、蕨摘に来る途の序に立寄る外は、都人の
尋ね來ぬ片山家は、即ち蕨の時を得顔に萌出づる所なり。而
して此の草は、能く高燥の地に生じ、羊齒類の普通の性質な
る陰濕の地を好むといふことは殆どなきに似たり。

我が國に於ける蕨の分布域は甚だ廣闊にして、殆ど全國に

權僧正永綠の歌。

互るが如く、紅塵萬丈の東京近郊に於てすら、なほ野生する
を見る。されど食料として柔軟肥大なるは、伊豆・駿河附近の
産を第一となす。春初、餘寒未だ去らざる時、帝都の會席料理
の膳の上に「走り」の贅を誇るものは、多く伊豆の邊より産出
するものなり。然れども古書には、蕨の美なるは奥州津輕・南
部、羽州秋田・庄内等を最とすと記し、和漢三才圖會も右の説
を引用したれど、そは恐らくは早蕨の味よりいふに非ずし
て、蕨粉・蕨繩の產地として稱せらるゝものなるべし。

吾人が羹を啜りて、拳の如き優しき青菜を味ふものは、即ち
蕨の新芽の萌出でたるものにして、漸く長ずれば、其の拳は
開きて丈三四尺となり、鳳尾の如き葉を展開す。其の色青緑

にして、眼も鮮かに、雨にあへば緑晶の露を滴らす。此の時に至れば、早蕨の拳の優しきふりはなけれども、鬱葱たる壯觀は又俗寰のものならず。こゝを以て築山の蔭などに栽ゑて、夏時清風に搖曳するを賞する者あり。盆栽としては一部好事者の喜ぶ所たるに止まるは、其の眺の僅かに早春の新嫩にのみ限らるゝを以てならんか。されど巧に栽養し得たるものは、數寸にして能く山野縹渺の景を描くに足るべし。地方の人は、春の初に方りて山野の枯草を焼けば、蕨の發生頗る佳良なりと稱して、屢山を焼くことあり。春月朧に霞みてそよとの風の搖ぎもなく、煙霞縹渺として野も山も薄絹の被衣を覆ひたるが如き時、遙かの山邊に點々として、炬火

の連なるが如く、近きは團々として朱盆を列ねたるが如く見ゆるは、蕨作りの山を焼くものにして、駿河路を夜行したる者は、必ず水彩畫圖に似たる這般の景情を深く眼底に印し來りて、再遊の念禁じ難き感あるべし。(前田曙山園藝文庫)

八 思ひ出

春の夜は靜かに更けぬ。はゆま路の竝木のけぶり。
箱馬車は轍をどりて 宮津より由良へ急ぎぬ。

朧夜の窓のあかりに、京むすめ、難波あきうど、
朽尼や切戸まうでや、 人の世の旅の道づれ。

(一) 丹後國與謝郡
(二) 同國加佐郡。

丹後國與謝郡吉津村の智恩寺を切戸の文珠といふ。

物語欠伸まじりに、

眠り目のとろむとすれば、

誰が子にか、後への方に、

をりからの追分ぶしや。

清らなる聲ひとしきり、

谿あひの水のせゝらぎ

咽び音に響きわたれば、

乗合はなみだこぼれぬ。

月落ちて闇の夜ぶかに、

箱馬車は由良に來つきぬ。

まろうどは車をおりて、

西東みちに別れぬ。

その後や幾春經けん、

おほ方は夢に現に

忍びてはえこそ忘れね、由良の夜の追分上手。

その子今何處にあらん。

思ひ出の清きかたみや

人々のこゝろに生きて、

とことにはに姿ぞわかき。

(薄田泣菫—二十五絃)

九音 樂

試に一曲の歌謠を聽け。吾人は之によりて得る感興に二要素あるを發見すべし。一は其の歌謠の意義が我が心を動かすものにして、他は其の音聲の高低・緩急・抑揚・強弱、概言すれば其の曲節が我が情を刺衝するものなり。

六、
三、
五、
二、
一、
四、

されど歌謠をなせる言語の意義は、文字に寫して目之を見るも亦よくこれを解するを得。其の音樂的要素にあらざるや論なし。されば歌謠のよく音樂たるは、一にその音聲の曲節に存すること明かなり。而して曲節は、言語より其の意義を除去したる音聲の上にある。かく言語をなさざる音聲は即ちまた器樂の依つて立つ所以の基礎なり。
吾人は固より、音聲其のものに一種の快美を感ず。これ恰も色彩其の物を見て喜ぶと同じ。一つの音が耳に快くして、他の聲が快からざるは之が爲なり。されど吾人は別に、此の感覺的快美の感より、進んで其の音聲に何等かの表象あるを感ずるなり。其の或は高く昂り、或は低く沈み、或は悠揚とし

て長く、或は急迫にして短き、一々皆吾人の心情と相應ずるあらざるはなし。吾人は且く之を名づけて情を含める音聲といはん。此の音聲は人々皆其の軌を一にして、互に扞格する事なきが故に、吾人は耳に他人の音聲を聽いて、心直に之を感應し、敢て謬ることなし。而して此の如き關係は、廣く之を推して、あらゆる音聲に及ぼすを得べし。蟲吟鳥語の如き、松韻濤聲の如き、もしくは金石相撃ち、風絃相鳴るが如き、自然界の音聲に對し、人の之を聽いて且つ泣き且つ笑ふは、皆之と理を同じうす。畢竟言語をなさざる音聲に、吾人心情の表徴あればなり。器樂の根本原理は實にこゝに存す。すなはち器樂は此の如き音聲の醇なるものを選び、粹なるものを取

*Symphony
交響曲

りて、所謂樂音なるものを定め、絲竹管絃を假りて之を出さしめ、藝術に必須なる形式を之に附與して複合構成せるものなり。而して其の資料たる音聲と、之を構成する形式とは、皆吾人の情生活に相應じて、一々其の表徴にあらざるはなし。月夜に吹きすさぶ一管の笛聲よりシムフオニーの大絃樂に到るまで、人の之を聽いて、或は泫然として涕をたれ、或は肅然として襟を正し、或は心神朗徹、遠く塵寰を脱して、直に天地と冥合する感を生じ、或は煩悶懊惱の思をなし、我と樂と融合化一して、樂聲の入つて我が心情となれるか、はた我が心情の化し去つてかの樂聲となれるかを疑ふに到るもの、其の源は實にこゝにあり。要するに、器樂の樂聲は人の

聲なり、人心の最奥處に潜める神祕なる琴線の動ける反響なり。

されど言語をなさざる音聲は特殊の意義を有せざるが故に、器樂の表象する感情は、一般的抽象的たるを免れず。例へば此處に悲哀の情を託せる一曲あり、吾人は之を聽いて涕泣嗚咽するを禁ずる能はず。樂曲の効果は斯くて足れり。されど其の悲哀は何の故に生じたる、如何様の悲哀なるかは、吾人遂に之を知ることなし。歡喜・平靜・苦悶すべて皆かくの如し。器樂の表す所は、特殊の人が特殊の境遇に於ける特殊の感情にはあらざるなり。若し此の如き感情の表象を望まば、吾人は之を言語に求めざるべからず、之を詩歌に求めざ

るべからず。

更に他の方面より之を見る。人の感情は、境によりてあらはれ、自然界の現象に應じて變化す。春和景明、風暖かに霞たなびき、小川の流緩うして岸邊の柳緑なり。人この光景に對すれば、氣暢び心ゆるやかにして、我また雙肩胡蝶の翼に化し、翩々として彼の菜花に戯れんとする思あり。器樂はよく此の心神暢快の感をあらはすを得ん。されど其の霞たなびける狀、小川の流るゝ狀、もしくは春風ゆるやかに柳條を梳る狀をばうつす能はず。此の如き敘述はまた之を言語に求めざるべからず、之を詩歌に求めざるべからざるなり。是に於てか、聲樂あり。聲樂は言語をなせる人聲、即ち歌詞に

施律ある曲節を附したるものにして、詩歌と音樂との結合せるものなり。(音樂通解による)

金言(三)

志於道、據於德、依於仁、游於藝。

惡紫之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家也。

一〇 十八樓の記

美濃の國長良川に臨みて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山左右に重なりて、近からず遠からず。田中の寺は杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は竹のかこみの緑も深し。瀑布處々に引きはへて、右に渡船浮ぶ。里人行

岐阜市にありき。

(一) 洞庭湖畔にあり。
(二) 浙江省孤山の麓にあり。



松尾芭蕉

きかひしげく、漁村軒を竝べて、網を曳き釣を垂るゝおのが
さまも、たゞこの樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏
の日も忘るばかり、入日
の影も月にかはりて、波
にむすぼるゝ篝火の影
もやゝ近く、勾欄のもと
に鶉飼するなど、誠にめ
ざましき見ものなりけり。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の
十の境も、涼風一味のうちに思ひやるべし。もしこの樓に名
をいはんとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

このあたり目に見ゆる物皆涼し。(松尾芭蕉―風俗文選)

一一 佐渡が島

(三) 越後春日新田停車場。

(四) 越後赤倉温泉にあり。

(五) 紅葉の句、「涼風のわが眉太し、佐渡が島」。

(六) 唐の白樂天の長恨歌の句、「春寒賜浴華清池、溫泉水滑洗凝脂」。

九時三十五分にこゝを發車して、忽ち眼明かなりと驚けば、
渺々たる日本海は折しも波に一船を著けず、雲に一鳥を帶
びずして、千萬頃の虚しく闊きに、たゞ池の如き潮の浩蕩と
して遊ぶのであつた。と見るに、瑠璃の煙る様に、物ありて幽
かに顯るゝのを、早くも「佐渡、々々」と案内する聲がした。信に
香嶽樓の縁端に伸びあがつて、「わが眉太し」と、この美人を天
の一方に望んだ佐渡が島は、今、目を遮る物もない三十海里
の波上に、「溫泉水滑洗凝脂」とやうに浮び出でたのである。
美なる哉、この島の風情。凡そ眺めて慙も懐かしく、又況へん

方無く心動かさるゝ遠景色は、これを他に求めて、己は有りとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とか云ふに、

佐渡へくくと草木も靡く、

佐渡は居よいか、住みよいか。

とあるのを見ても、この景に對して心を動かさるる者は無いと知れる。殊に「居よいか、住みよいか」と疑つた處に、言はれぬ妙が有るので、この唄の精神も唯その九字に存すれば、又この景に人の恍惚たるのも頗るその九字の感に堪へぬのである。又彼の「來いとゆたとて行かれよか」の如きは、苟も日本語を解する者にして知らざるは無きまでに轟いて居る。其處が古の配處であつたとも知らず、今も小判に成る物が

來いとゆたとて
行かれよか佐渡
へ、佐渡は四十
九里波の上。

出ると知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處と云ふ事は皆心得て居る。それほど口吟を思はずに、誰一人こゝが過ぎらるゝであらう。遙かに佐渡が見える。「四十九里」と直に胸に浮ぶ。それにしては近いやうだといふ疑が又起るのである。能登の輪島から四十九里と云ふ説が有つて、とにかく越後の唄ではないに極つて居る。佐渡の相川の人の談に、極々快晴の日、所謂日本晴には、能登の珠洲崎が雲煙縹渺として、見ると謂へば見える位に見える。その人は「一年の中に唯一度見た」と云ふ。因つて「來いとゆたとて行かれよか」の首を回して遠人を憶ふ惆悵無限の意が殊に深い。これに就て思ひ出したのは、過ぐる年、富小路侍従の行くを送つた、岸田吟香翁

富小路敬直。

の歌である。なかく面白。

大君のみことかしこみ、來いとゆたとて

行かれよかといふ佐渡へ行く君。

己も亦一句無かる可けんやと、

來いといふ人あれ、島は涼しげなり。

抑、この海の雄渾と併せてこの島の秀麗を見るのは、北越鐵

道線雙快の一で、他は更に進んで、鉢崎から柏崎に抵るまで、

米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつゝ、八門のトンネルを出

入するのである。その趣は稍東海道線の薩埵峠を過ぐるに

髣髴たるのであるが、それは皮相の似たるばかりで、彼に在

つては全くこの氣魄を闕く。

(一)(二)(三)
ともに越後國の
海岸に沿へり。

(四) 駿河國庵原郡。

道は荒波の磯邊であるから、一面岩石突兀として、或は潮に
臥し、或は草に蹲り、或は山に逆らつて峙ち、或は水に臨んで



尾崎紅葉

者に在つては、百歩にして崖
と墮がり、二百歩にして巖鼻
と突出るのを、總てトンネル
に貫いて、佛に逢へば佛を殺
し、祖に逢へば祖を殺し、道に

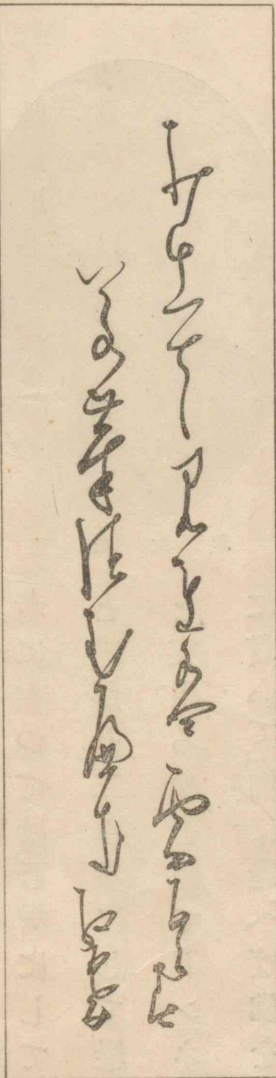
當る者有れば必ず突いて進むのである。

トンネル續きの線路は碓氷であれ、箱根であれ、皆理の同じ
からぬは無いが、別してこゝにその想が有るのは、長汀透迤

(五) 佛祖機縁四十八
則中の句、「逢
佛殺佛、逢祖
殺祖、於三生死
岸頭、得大自
在。」

(六) 信濃國に在り。

として、六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、
甲のトンネルを出づれば直に乙のトンネルの全景が見え
る、乙を過ぐれば丙、丙を去れば丁と、彼等の争つて五月蠅な
すのが一々目に入る。譬へば己大剛の者にして群がる敵を



尾崎紅葉筆蹟

物の數ともせず、當るを幸ひ、一太刀宛、片端から撫斬にして
通るもかくやと覺ゆる様で、而も處は弓手に方りて日本海
逃るゝ路も荒磯の浪、鞆々と寄せては返す関の聲、馬手には

打出て見れば若
菜つむべき雪あ
らす。紅葉紅葉の

峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたりと
思へば、殆ど快極まつて肉躍るのであつた。こゝを過ぐれば、
汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネ
ルも時に取つて興となつて、なか／＼神経などを衰弱させ
て居る段ではなかつた。(尾崎紅葉—煙霞療養)

一二 人工の美と自然の美上

人の作爲せる美術の美は人工の美にして、山水の景色の如
く人工を竝たずして存する美は自然の美なり。今、人工の美
と自然の美とを對照してこれを考察するに、人工の美は迴
かに自然の美に優るものあり。かく言はゞ、人或はその果し

て然りや否やを疑ふべし。請ふ少しく余が思惟する所を敘述せん。
 自然界の情態を瞥見せよ。到る處唯佳境のみ之あるにあらず。平凡なる河川あり、平凡なる丘陵あり。かく平凡なるもの相集まりて一境を成し、毫も人の注意を惹くに足らざるもの少なしとせず。然るに尙之より甚しきものあり。何ぞや。塵埃あり、汚物あり、不淨の下水あり。惡臭鼻を打ち、穢色目を遮る。而して卑賤の徒その間を往來し、何等の見るべき物なし。かくの如きは、豈に取りて以て美術の材料となすに足らんや。然れども風景の佳なる處亦少なしとせず。唯日本の佳景のみを數ふるも殆ど際限なし。況や世界萬國の佳景をや。

宋の詩人。

然るに美術は、此等の佳景を擇んで之を寫出することを得るなり。又通常の景と雖も、僅かに配合を異にすれば佳景となる事あり。例へば荒廢せる庭園の如き、月色と梅花とを添へて、忽ち無限の趣味を加ふることなしとせず。曉光の如き、殘照の如き、飛雪、飛雨の如き、鳥聲、蟲聲の如き、皆境遇如何によりて情緒を添へ來るものなり。杜^{*}小山が句に「尋常一様窓前月、纔有梅花便不同。」と云へるも亦此の邊の消息を傳ふるものなり。先に擧げたる平凡若しくは汚穢なる境と雖も、一夜の雪に埋められて銀世界を成し、家々の燈光紅なるに際して、偶、浮雲破れて月光を洩さば、其の光景必ず人目を眩するに足るものあらん。然れども此の如き佳景は常に之ある

にあらず。唯時ありて現出するものなり。美術は此等の佳景を擇んで之を寫出することを得るなり。自然界の佳景は方處と歳時時節とによりて之を異にすと雖も、美術に於ては、唯かくの如き佳景をのみ抽出抽出する自由を有するなり。又作者の伎倆如何によりては、種々なる佳景の粹を集め、打打して一丸となすを得べきなり。彼の人事界の現象現象と雖も、離別邂逅悲憤等の如き、殊に情緒の激發せる場合を擇びて之を寫し出すの便あるなり。之を要するに、人工は、自然界に於て決して遭遇し得べからざる理想的の佳景をも、一幅の中に現出するを得べし。人工の美の自然の美に優る所以、以て知るべきにあらずや。

* Tyrol.
地。 埃太利の勝

其の他、美それ自身の優劣以外に吾人の注意を惹くものなきにあらず。自然の美は各、その局所に限らるゝが故に、往いて之を見るにあらざれば、其の美を享受すること能はず。即ち瑞西の佳景を見んと欲せば、瑞西に往かざるべからず。チロルの佳景を見んと欲せば、チロルに往かざるべからず。其の他いかなる佳景と雖も、身親ら其の地に往くにあらざれば、其の美を享受すること難し。但し人工の美はこれと其の選を異にし、運搬すべく、又携帶すべきなり。繪畫に寫し出せる瑞西若しくはチロルの景は、吾人之を室内に懸け、朝に夕に左顧右眄して其の美を享受するを得べきなり。これもとより、美それ自身の優劣よりは、むしろ美を享受すべき方法

の便否に關するは言ふまでもなければ、また人工の美が自然の美に對して一頭地を抜く所以なりと謂ふべし。

一三 人工の美と自然の美下

人工の美はまた、吾人人類の意思力によりて製作せられたる産物なり。故に自然の美よりは迥かに吾人に親密なる關係あり。自然の美は吾人に先だちて存するものにして、もと吾人に關係なきものなり。吾人が之に對するに當りて、吾人を喜ばしむることもあれど、又吾人に敵することもあり。雪景の美に伴ふ寒さは肌膚に砒するが如く、電光の美に伴ふ威力は心胸を驚かすに足る。大海の風濤、巨嶽の雲霧、美は美

なりと雖も、其の壯大の景、却て恐怖心を生ずることなしとせず。然るに人工の美に於ては、毫も此の如き痕跡あるを見ず。室内安全の處に於て、茶を喫しながら之を賞翫するを得べきなり。要するに自然の美は人工の美の如くに親密なるものにあらず。兒童の如きは、未だ天地山川の美を楽しむことを知らず、却て自ら粗末なる圖畫を試みて之を楽しむこと、顯著なる事實なりとす。されば人の自然の美を楽しむは、比較的成長したる後の事にして、且つ已に自然の美を楽しむを知るも、尙其の縮寫を懸けて之を賞翫するの安きを好む。是に由りて之を觀るも、自然の美は人工の美に對して一籌を輸せざるを得ざるものあり。

然れども又一概に論ずべからざるものあり。若し吾人が容易に名工の名作を得べきものならば、人工の美の自然の美に優ること論なしと雖も、吾人の希求を充すべき名工の名作は極めて鮮し。僅かに之ありとするも、之を得ること容易なりとせず。たゞ凡工の凡作に至りては得がたきにあらずと雖も、以て吾人の希求を充すに足らざるなり。果して然らば、人工の美を享受せんことも、豈に然く容易なりとせんや。唯自然の美に對して比較的に得易しといふべきのみ。然らば自然の美は到底人工の美に及ばざるか。然り、然りと雖も、吾人は又自然の美に於て、人工の美が決して及び難きものあるを認容せざるを得ず。吾人其の活動あるを謂ふに

天
龍
地
神

(二) 駿河岡庵原郡
常陸國東茨城郡

(三) Vesuvio.
伊太利にあ
り。

あらず、又其の音聲あるを謂ふにあらず。然らば何ぞや。他なし、其の壯大なる事是なり。試に都門を出て、海邊に至れば、白砂青松一點の塵もなく、長風面を吹き、濤聲耳を洗ひ、眼に映ずるものは水天一碧、頓に心胸を豁大ならしむるに足る。若しそれ興津の如き、大洗の如き、亂巖突起の處に到れば、怒濤遠くより坤軸を捲いて來り、忽ち巖角を打ちて飛沫四散し、滿天の雪流れて水晶の簾となる。その壯快言はん方なし。或は又富士若しくは御嶽の如き高山に登れば、白雲大麓を繞りて、身は却て天半に懸り、眼界茫茫、人生の蜉蝣を思ひ、世界の無窮を感じ、氣象頓に豁大なるを覺ゆ。若しヴェスヴィオ又は淺間の如き火山に登り、噴火口に接すれば、水火相戰

うて炎煙空に漲り、其の勢の猛烈なる、殆ど人をして股栗せしむ。名工は如何なる壯大なる景をも寫し得べしと雖も、繪畫は僅々自然の一小部分を縮寫せるものなるが故に、壯大の一點に於ては、到底自然その物に比較すべくもあらざるなり。(井上哲次郎)

金言(四)

知之者、不如好之者、好之者、不如樂之者。

一四 をさな兒

こぞの夏、竹植うる日のころ、憂きふししげきうき世に生れたる娘、ものに敏かれとて名をさと、よぶ。ことし誕生日祝

あつた日、あつた日、あつた日

ふころほひになり、手うちく、あは、天窓てんく、かぶりかぶり振りながら、おなじき子どもの風車といふものもてるを、頻に欲しがりてむづかれれば、とみにとらせけるに、やがてむしやくしやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつ、それまたちちに倦みて、障子のうす紙をめりく、むしるに、よくした、よくした。とほむれば、誠と思ひ、けらくと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらくしく清く見ゆれば、なかく心に心の皺を伸しぬ。又人の來りて、わんくはどこに。といへば、犬に指さし、かあかあは。と問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬

こぼれてあいらしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺ゆる。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、たゞちに物投げすてゝ片ゐざりにゐざり出でゝ、聲を上げ、手眞似して嬉しげなるをみるにつけ、いつしかかれをも振分髪（たげ）のたけになして、踊らせたらんには、二十五菩薩（にじゅうごぼさつ）の管絃（くだり）よりも遙かにまさりて興あるわざならんと、我が身に（み）つもる老を忘れて、憂（うれ）さをなんはらしける。
かく日すがら、牡鹿の角のつかの間も手足を動かさずといふことなく、遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけて、やがて

見
昔の歌
白紙十巻

閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手ばしこくもいだしき起して、乳房（ちち）あてがへば、すはくくと吸ひながら、胸板（むね）のあたりをうちたゝきて、にこゝと笑ひ顔をつくるに、母は長き胎内の苦しみも、日々の襁褓（むすぶ）の穢（けが）はしきも打忘れて、手のうちの玉となでさすりて、獨りよろこぶなりけり。

蚤のあと數へながらに添乳（ちつけ）かな。(小林一茶)

一五 孟母

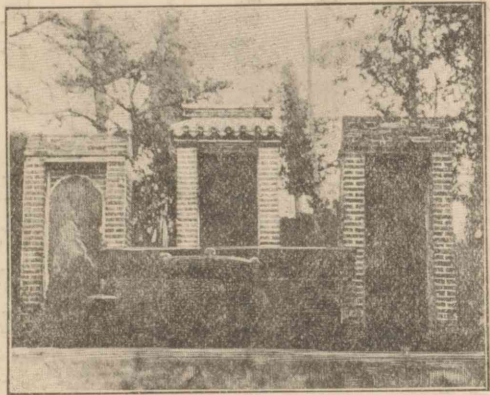
孟母とは鄒（しゅう）の孟子の母なり。孟子いとけなかりしより、父なく、母に育てられけり。その住める家、墓所に近かりければ、孟子はをさなあそびに、亡き人を送りて泣悲しむまねをし

*山東省にあり。

けり。母かねて孟子を學者たらしめん心なりければ、憂きこと
 とに思ひ、「これ子を育つべき所にあらず」とて、立去りて、市の
 ほとりに住みぬ。孟子また商人の賣買ふわざをまねびけれ
 ば、母なほ安からず思ひて、更にまた學院の傍に遷れり。孟子
 それより學生の習禮を見ならひて、禮器をつらね、威儀進退
 をまねびけり。母よろこびて、「これぞ子を置くべき所」とて、遂
 にこゝに家居を定めけり。

ある時、孟子東鄰に猪の庖丁したりけるを見て、「あれは何の
 ためにかする」と問ふ。母ふと戯れて、「汝にめさせん爲にぞ」と
 答へけるが、悔いて思へらく、古の婦人には、子のために、胎教
 とて、うまれぬ前より教ふる道のありけるを、今、我この子の

まさき智慧づきなんとするに及びて、跡のなき事をいひ聞
 かせたるは、まさしく詐を教ふるにこそとて、竊かに猪の肉



孟 母 の 墓

を買ひて孟子に與へたりとぞ。
 かくて、やう／＼おとなしくなり
 しかば、他郷に物學びせさせける
 が、未だ成業に至らずして家に歸
 れり。母は折ふし機を織りて居た
 りしが、何しに歸り來りしぞ。又學
 問の進める程はいかに」と問ひし
 に、「さほどにも無けれど、母上のこひしければやめて歸りぬ」といひければ、母刀を取りてその織物を斷截りけり。孟子驚

きて、其の故をとへば、母のいはく、「汝惰りて學問を棄てば、かくの如くなるべし。それ君子は學びて名をなし、問ひて知を廣む。よりて身常に安くして禍なし。今、汝學問を爲すことなれば、後には品くんだり、人にさし使はるゝばかりにて、憂を免るゝことあらじ。さてはこの織る機の、中絶えてすたるに異なることあらんや。女、業を勤めなさずして棄てば、身をやしなふ道なからん。男、徳を修めずして惰らば、後いかで善き者とならん。もし盜とならずば、奴となりはつるより外なかるべし。」といふ。孟子これを聽いて大いに悟り、それより學を勤めて止まず、孔子の孫、子思を師として遂に大儒となり、譽を後の世の殘せり。（中村惕齋—比賣鑑）

一六 息女に教訓す

一筆申しまゐらせ候。然ればそもじ、幾千代の色もかはらぬ常磐木の枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべき由、誠にめでたう覺えまゐらせ候。申すまでも候はねども、身持やさしく、心おとなしく、さゝれ石のいはほとなりて、苔のむすまで繁昌して、孫子の末々までも御榮え候やうにと打願ひまゐらせ候により、筆に任せて申しまゐらせ候。

第一、慈悲の心ありて、人を憐み、蟲獸の上までも露の情を懸けたまひ、おもては唯青柳の絲の風に靡くが如く、

*わが君は千代に
八千代に、さ
れ石の巖となり
て苔のむすま
で。（古今集、讀
人不知）

*史記の語。

物和かにして、人の心を酌知り、僻める心を押直し、御嗜
みなさるべく候。さて又、心の中は石や金よりも堅く、あ
だなる心をもち給はぬ事肝要にて候。忠臣二君に仕へ
ず、貞女兩夫に見えずとあれば、くれぐれ此のことわり
を朝夕心に懸け給ひ候は、神や佛の御守もおはしま
すべく候。

第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念の事候とも、
その氣色を露ほども見せず、何となく打向ひ、春は青柳
梅櫻鶯雲雀、夏は卯の花、菖蒲、橘、杜鵑、螢、秋は月、紅葉、露、霧
蟲、鹿、冬は雪、霜、霰、鶯、鷹、何れも其の折に觸れたる物語
などして、懇に取りはやし給ふべく候。さりとして年若き

人のあまりに睦まじげなるも、外目いかあるべき。唯
何となく愛々しく候はん事こそあらまほしく候へ。
第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候と
も、しのびやかによまひ言をも言聞かせ給ふべく候。そ
れをも聞入れず候は、責め誠めもあるべく候。さりと
て主などの聞かせ給ふ處にては、口惜しく候。如何にみ
め姿うるはしき兒女房なりとも、腹を立てたる顔は見
にくきものにて候。しかも若き人、聲高に怒り候體、あさ
ましく候。さてよまひ言をも聽くまじきものと思ひ給
は、里へ返し候は、さのみ苦勞もあるまじく候。男も
女もあまり短氣に候うては、難も出來、召使はれ候もの

もよそへ悪しきやうに名を立て、後には逃去るものにて候。歌に、

*新古今集の歌。

吉野なるなつみの川の川淀に

鴨ぞ鳴くなる、山陰にして。

とよめる歌の心は、吉野の川は早く候、鴨は水の上に住むものなれども、あまり早き處には住みがたく、川淀とて水の淀む處に遊ぶとなり。況や人閒の烈しき處にはながらへ難く候。

第四、夫婦の間、高きも低きも睦まじく候はん事こそ、よその聞えもよろしく、心にくうも侍らめたとひ幾千代を送り給ふとも、聊かも主に見落されぬやうに朝夕嗜

み候はんには、いよ／＼千秋萬歳を保ち給ふべく候。さて又無念の事をもさのみ思ふべからず。たゞ世の有様をつらく／＼と見て、心をものどやかに過し給ひ候はゞ、行末好き事のみにてあるべく候。歌に、
事足らぬ世をな恨みそ、鴨の足の

短くてこそ浮ぶ瀬もあれ。

さて又心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にてもおめずして、しとやかに書きなしたるは、いとけだかく見ゆるものにて候。上にも下つ方にも、無手に候へば不自由なるのみかは、其の身も賤しく成りさがるものにて候。われ人の用に立ちなんものは、

第一鳥の跡なり。と或書にも見え候まゝ、常々御稽古ありたく候。殊更和歌は家のものなれば、申すに及ばず候へども、尋常に、けだかく、四季に應じて御よみあるべく候。

男も女も萬につけて身持心遣、肝要に候。善きが上にも善きやうにと願ひまゐらせ候。

あまり山鳥の尾の長々しく書連ねまゐらせ候。なほ重ねて御祝のかずと、申し承り候べく候。めでたくかしこ。(烏丸光廣)

金言(五)

温故而知新、可以爲師矣。

禮之用、和爲貴。

一七 柔和なる返事

「目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふ。」とは、打てば敲くと云ふと同様に、先づ世間普通の仕來りと見る可し。されど、若し聊かにても平和を欲する心掛あるものは、強き言葉には、柔かなる言葉を以て報ゆるぞかし。是、即ち柔能く剛を制する所以と知る可し。

一家の内に於ても、媳と姑との間、夫と妻との間、若しくは親子、兄弟、姉妹の間、或は夫人と下女との間、色々の間違なきにあらざり。而して其の間違は、概して言葉の行違より來る。世の

better half

*新約全書馬太傳五に出づ。

中に感情の衝突程、恐ろしきものはなけれども、その衝突の原因は、概して言葉の行違より来るもの多きに似たり。何人も己を制せねばならぬ筈なれども、時としては一寸したる場合に、己の性情を取亂し、思はずも激しき言葉を放つことなきにあらず。かゝる時に際して、若し此の激しき言葉に酬ゆるに、更に激しき言葉を以てせば、雙方の悪感に油を濺ぎ、彌、以て衝突の火の手を強からしむるに至らん。若し之に反し、一方より怒氣を含みて尖りたる言葉を發したるに對して、從容自若として、平氣なる返事をなす時には、所謂風に柳暖簾は腕押しの類にして、殆ど拍子抜けの姿となり、將に燃えあがらんとしたる衝突の火の手も、水をかけられたるが

如く、乍ち消え失せぬ可し。

されば柔和なる返事は、男女に限らず誰にも大切なれども、わけて婦人には大切なる可し。例せば、夫が怒氣勃々たる熱頭を以て外より還りたる時、若し夫人たるもの、此の潮合を察せずして、漫に無愛想なる返事をなすが如きことあらば、一家の風波乍ちこれが爲に起るべし。否、起らざるを得ざるべし。

昔は、淺香山、影さへ見ゆる山の井の淺き心を吾が思はなくに、の歌を詠じて、人の怒を和けたる賢婦人ありき。かゝる例は今も尙古の如く、日々出で来るなり。宜べなるかな、ソロモン王の金言や、柔和なる返事は怒を鎮む」と。若し此の金言を

(二) Solomon.
(B.C.993—953)
イスラエル
國王。

采女の歌なり、
萬葉集に見ゆ。

服膺せば、世の風波の十中の五六迄は鎮定するに難からざる可し。(徳富蘇峯―生活と處世)

一八 質素

質素は虚飾の反對である。徒に上邊を飾つて其の見えばかりをよくせぬことである。故に又質素は奢侈の反對即ち節儉であると言つてもよい。凡そ虚飾を好む人は必ず奢侈に走る人である。奢侈に走る人は必ず虚飾を好む。而して質素主義の人は必ず奢侈に走らない。随つて其の經濟に餘裕を生じ、道德の基礎もこゝに成立するのである。然るに人は一般に上邊を飾りたく思ふものである。随つて

知らず識らず奢侈の弊に陥り易い。何故に人は一般に上邊を飾り、見えをよくしたのであらうか。遠く其の本を推せば、美を愛する觀念が本となつて、終に此の餘弊を生じたものであらう。

蓋し人として、美を愛する心の全くないものは恐らくあるまい。男女を問はず、人は一般に美を愛して止まぬものである。例へば吾人が春は花を愛し、秋は月を賞し、或は時に山水の景色を眺めてこれを賞翫し、或は時に繪畫、彫刻の類を見て其の心を慰めるのは、畢竟美を愛するといふ觀念があるからである。若し美を愛する觀念がなかつたら、世に詩人と呼ばれ、歌人と呼ばれ、又文人と謂はれ、墨客と稱せられるも

のは恐らく出來ないであらう。彼の音樂の如き、活花の如き
 技藝は言ふまでもなく、日用の衣服若しくは器具の如きも
 のに至るまで、多少、美的觀念の力に由つて發達して來ない
 ものは殆どないと謂つてもよい。
 彼の食物の如きは、元來口中にこれを味ふことを本とする
 もので、決して目に見て悦ぶべき筈のものではない。然るに
 同じ食品の中で、形の美しいものと美しくないものとの兩
 様があるとしたら、吾人はどちらを選び取るであらうか。其
 の美しい方を選び取るに相違ない。是は美を愛して止まぬ
 自然の人情から來るのである。
 しかも此の美を愛する觀念は、世の文明と共に進歩して來

るものである。試に、野蠻人と文明人とを比較すれば、野蠻人
 には、たとひ此の美的情操があつたにしても、洵に幼稚なも
 のである。然るに文明人の美的情操は、野蠻人の到底想像す
 ることの出來ぬほどの度にまで發達してゐる。即ち美的情
 操は文明人種の標幟である（ヨロシ）と謂つてよい。故に吾人は、決し
 て美を愛することを儻事として排斥するといふやうな愚
 を學ぶものではない。寧ろこれには大いに同情を表してゐ
 るものである。

従つて吾人は、女子の櫛笄を以て全く無用の贅物であると
 は言はぬ。又女子の紅白粉を全く止めてしまへとは言はぬ。
 又女子の服裝を男子のやうに質素にせよとは言はぬ。若し

試に男子を竹に比すべきものとすれば、女子は梅もしくは櫻に比すべきものであると言はねばなるまい。然らば竹の畫には花を描くべき必要はないが、梅や櫻の畫には必ず花を描かなければならぬやうに、女子の身は男子と異なつて、多少の粉飾を要するは論を俟たぬことである。しかし過當の粉飾は、女子といへども大いにこれを誡めなければならぬ。

極めて貴き心の玉を持ちながら、これを磨いて心の美人とならうとはせず、たゞ徒に外形の見えをよくするために、紅や白粉などで其の膚を美しくすることにのみ心を奪はれて、綺羅錦繡を其の身に装ひ、人目を掠めようとするものは

世の中にあるまいか。余は多數の女子の中には、随分斯くの如きものがあるだらうと信じて疑はぬのである。是等は啻に虚飾なるのみならず、驕奢といふべきである。此の虚飾的驕奢こそ、實に美を愛する心から來る一種の弊害といふべきものである。

余は元來美を愛するけれども、此の虚飾的驕奢は愛美の餘弊として、努めてこれを排斥しようとするものである。余が此の虚飾的驕奢を排斥しようとするのは外ではない。虚飾的驕奢は道德と決して相容れぬからである。これを古人に求めても、これを今人に徴しても、世に忠臣・義士・孝子・節婦・賢女等の美名を被るもので、虚榮心に驅られて虚飾に走り驕

*求忠臣必于孝子之門(通俗篇)

奢に流れるやうなものは、斷じて一人もないと謂つてよい。古人が「忠臣は孝子の門に求めよ。」と言つたやうに、總ての道徳家は質素を守つて居る人の中に求むべきである。世人は、此の質素・儉約が經濟上に必要であることばかりを知つて、道徳上に必要なことを知らぬ。これは余の最も遺憾とする所である。質素・儉約は或は直に道徳といふべきものではなからう。されど此の質素・儉約が間接に道徳の上に及ぼす影響の頗る廣大であるといふことは、古今道徳家の行跡に徴してこれを推考すれば、何人も疑を懐くことは出來ぬのである。故に余は常に質素の必要を唱へて止まぬのである。

(村上專精—女性訓)

金言(六)

質勝^テ文^ニ則野。文勝^テ質^ニ則史。文質彬々^{トシテ}然後君子。奢^レ則不孫^{ニシテ}儉^{ナレバ}則固^{ナリ}。與^リ其不孫^{ナル}也、寧^モ固^{ナレ}。

一九 當意即妙

一 籙師入道

見しは今、下總の國小弓の大巖寺は淨土宗關東第一の學寺たり。先年この寺に安譽和尚と申す名匠まし、五百人の所化を集めて、法幢を執り給ひぬ。中に清林といふ所化、才敏にして一事を聞いて萬事を知る。學問世に勝れて、文殊の智慧・徳相を得たりといひならはす。法問の時に至つて、この寺

の番頭を始め老僧達、牙を齧んでこの清林と論談すと雖も、清林、佛祖の妙文明句を取つてあはせ、一問答に押しつむる。或時は孔孟老莊の金句を以て答へ、或時は世俗の言葉、目前の境界を以て示し、狂言綺語を以てあやなし、言葉に花を咲かせ、理に珠を聯ぬ。布留那の辯を振ふ事以て譬ふるに足らず。故に老僧達、嗔恚を起し、それ智者は其の功を建てん事を願ひ、威名を四方に達せんとするに、彼の清林一人此の寺にある故、我等が二十年三十年の修行も空しく埋もれ、見佛聞法の人に無智に思はるゝ事の無念さ、口惜しさよ。如何にもして寺中を追拂はゞや。」と罵りあへり。或時一老と清林と詞答めして諍ふ。一老心いらだちて、「あの籠師入道め。」と悪口す

れば、清林も腹こそ立ちけめ、「妻俱し入道め。」と返答す。一老聞きて、「言語に斷えたる悪言かな。妻俱し入道の仔細聞くべし。」といふ。五百人の所化此の由を聞き、「あの籠師入道めを年月日頃憎し〜と思ひつるに、斯かる悪言吐く事、大巖寺前代未聞の悪僧たり。一老に恐もなく、却て災難を申し懸くる事、末代までも大巖寺を汚し、浄土一宗に疵を付くる事、惡逆無道、其の罪逃るべからず。唯、石子詰にするに若かじ。」と、五百人の所化ども、石を持寄りて庭に積み、已に清林を呵責せんとす。上人爲ん方なく、清林を衣の袖の下へ隠し置き給へども、徒なる所化ども亂れ入りて、叶ふべしとは見えざりけり。上人思しめすやう、此の清林は口才辯舌世に越え、當意即妙

の氣轉坊主なれば、必ず「めぐし」の言ひわけあらんと、上人、清林を引連れ、庭へ飛んで下り、待て暫し、所化ども、雙方對決し、妻俱し入道の仔細を聞き、非に落つる所を以て科に行ふべし。」と宣ふ。五百人の所化共、此の義尤もと同じ、大庭へ出で、雙方仔細を聞くに、一老申されけるは、「彼の清林めは伊勢の國渡會の郡山岸と云ふ里にて生れたり。親をば彌五郎と云ひて、其の里の桶の箍をかけて身命を送る、其の箍師の子なるが故に箍師の入道と云ひたり。扱、妻俱し入道の仔細聞くべし。」といふ。清林答へて、「尤も道理あり。さればこそ、其の方が父は妻を俱して汝生れたり、其の妻俱しの子なるが故、妻俱し入道といふ。」といひければ、上人を始め五百人の所化、奇特

徳川家康。

(二) Tenterden.
(1762-1832)
(三) Barrister.

凡慮に及ばぬ即妙なる返答、世に聞えたる氣轉坊主かなと
感じ、一同はどつと笑ひて退散せり。

此の清林、修行成就の後、琴上人と申して、關東にて法幢を執り、智德靈驗にまします。今は京東山の黒谷に住み給ひけり。大御所様殊更御信敬あり。諸人渴仰の首を傾けずといふ事なし。當代淨土の名智識と聞えたり。(慶長見聞記)

二 理髮師の子

テンタルデン卿は素と理髮師の子であつたが、法律を學んでパリストルと爲り、後には高等裁判所の判事總長に進み、貴族にも列せられた程の人であつて、其の判決に判例として有名なものが多いことは、英法を學ぶ者の熟知する所で

ある。

未だバリストルであつた頃、彼は或事件に就て法廷で相手の辯護士と論争した。論熱し、語激するあまり、相手は終に人身攻撃の卑劣手段に出でた。

「汝、今こそ鐵面皮に大言を吐けども、元來理髮師の子ではないか。」

罵り得たりと彼は肩を聳かしたが、忽ち靜かなる反問を請けた。

「汝は如何。」

昂然として答へて曰く、

「余は法律家の子なり。」

テンタルデンは冷かに笑つた。

「汝は法律家の子なりしが故に法律家となり得たのであるか。幸福なることよ。若し汝をして吾輩の如く理髮師の子ならしめば、今頃は客の頤に石鹼を塗つて居る所であつたらうに。」（穂積陳重―法窓頁話）

二〇 井上通女史

紀元二三二〇。

女史は、萬治三年六月十一日、讃岐國丸龜城の西なる御手廻長屋に生る。幼名を玉、また振といひ、後に通と改む。父を井上本固といふ。京極侯に事へて祿二百石を食み、頗る程朱學に通ぜり。渡邊氏を娶りて三男二女を生む。女史はその長女な

り。女史、容姿端麗、幼にして穎悟、五六歳にして烈女傳、女誠等を讀みて略その義を解し、且つ和歌及び手跡を學べり。七八歳にして物語、草子を讀み、殊に源氏物語を好み、その妙處は、悉くこれを暗誦せりといふ。十二三歳の頃より漢學に志し、數年にして經傳、史籍を初め、諸子百家の書殆ど涉獵せざるはなく、且つ詩文にも巧なりしかば、當時已に少年女博士と稱せられて、名聲噴々たりき。十六歳の時處女賦を作りて自ら戒む。その豊富なる學殖と著實なる識見とは、文辭の上に躍如たるものあり、蓋し既に老成人の風ありしなり。由來學藝に長じたる女子の、家庭の事に疎きは免れ難き通弊なるに、女史は裁縫、績織の業は更なり、洒掃、割烹の事に至るま

で精通せざるはなく、能く慈母を助け、小妹を導きしかば、井上の一家は和氣洋々として、春風常に吹きわたるが如くなりき。

*紀元二三四一。

*天和元年、藩主京極高豐侯の母堂養性院、女史の才名を聞き、江戸藩邸に召して侍女となし、傍子女の教育を助けしめらる。女子乃ち父に隨ひて江戸に赴きぬ、時に年二十二。東海紀行は此の時の日記なり。當時の碩學室鳩巢これを讀みて、其の文章識見を激賞せり。

女子江戸に在りて養性院に奉仕すること九年、晝は公務の傍、文學上の談話をなし、夜は草子、物語、烈女傳の類を讀みてこれを慰め、又命によりて、公女及び侍女の爲に讀書、習字等

さして物好ま風雅

女も松海

うもるる

心流

三石

侍

井上通女筆蹟

(東京村松清陰藏)

を教へたり。しかも其の閒、日夜の精勤他の侍女と異なることなく、その主君に忠に、同僚に厚きこと、人々感歎せざるはなかりきといふ。

*元祿二年、養性院病革まるや衣帯を解かざること十數日、寢食を忘れて病床に侍し、悃誠至らざる所なく、只管看護に力を盡しけれども、遂に簀を易へられれば、女史が哀悼の狀言語に絶

し、殆ど人事を辨ぜざるに至れり。喪期既に終るに及び、諸藩聘を厚くしてこれを招きけれども、「忠臣不事二君」とて、悉くこれを辭し、暇を告げて郷里に歸れり。歸家日記三卷は此の時の紀行なり。

抑、天和・元祿の頃は文運隆盛の時代にして、江戸は碩學鴻儒の淵叢なりければ、女史は養性院に奉仕する傍、林鳳岡、新井白石、室鳩巢、跡部光海等の諸大儒と交はり、學識大いに進みぬ。時の將軍綱吉公また女史の才學を聞き、屢、大奥に召して其の講説を聞き給ひ、「通女、汝の説に感ずる所あり」と宣ひ、侍臣臺旨を傳へければ、女史これより自ら感通と稱せり。女史の丸龜に歸るや、閒もなく良縁あり、同藩士三田茂左衛

門宗壽に嫁せり。こゝに於て、深く自ら期する所あり、純然たる家庭の主婦となりて、また詩歌・文章を弄せず、裁縫・績織より洒掃・應對に至るまで、家庭の細事を以て務となし、心を傾けて舅姑に事へ、良人を助け、啻に才學を以て誇らざるのみならず、謙抑自ら守り、恰も文字を解せざるものゝ如くなりき。其の結婚の初、姑より祝意を詠ずべしとの勸を受け、再三辭したる後、詠出でし歌に曰く、

かはらじと頼む妹背の山水に、

萬代おなじかげをこそ見ぬ。

亦以てその貞淑の情を察すべし。

良人宗壽は剛直なる勇士なり。十六歳の時、母家の爲に復讐

を遂げ、武名赫々として藩中に隱なかりき。されども性嚴峻、動もすれば奴婢を怒罵して、鞭朴をさへ加ふることあり。加ふるに舅姑は共に世情に通ぜず、家道甚だ裕かならざりき。女史其の間に在りて溫柔・貞淑、勤儉家を齊へ、仁慈奴婢を率ゐければ、家庭輯睦して閒言を聞かず、家道また年を逐うて裕かなるに至りぬ。其の著、深閨記は述作の年代詳かならざれども、家庭に對する女史の理想を述べたるものにして、女史の家庭は即ちこれが實例を示せるものといふべし。元祿十年、弟、井上益本、血氣の勇にはやりて藩法を紊りしかば、女史憂慮措かず、乃ちこれを其の家に招き、嚴然過を責めて、少しも假借せず。而してその一旦自ら悔ゆるに至れば、釋

然怒を解きて、涙ながらに一夕を語り明して永訣をなし、翌日自首して法を正しうせんことを乞はしむ。藩特に許して死を賜ふに及び、愛慕禁ぜず、日夕展墓して其の靈を慰めきといふ。當時の詠に曰く、

たのもしき陰と頼みし井の上の

桐の一葉ぞ霜に朽ちぬる。

その嚴乎として、操守あること、男子も亦及び難きものあるを見るべし。

紀元二三七〇。

寶永七年宗壽歿し、舅姑亦相尋で歿しければ、長子宗衍の爲に長野氏の女を娶りて、家事一切を委ね、主婦としての女史の任務はこゝに終を告げぬ。かくて閑散の身となりたれど

も、徒に風月を友とせんことは女史の志にあらず。是に於て結婚以來深く韞みたりし學識を擧げて、季子義勝の教育に傾注し、其の才徳を玉成し、遂にこれをして一藩の木鐸たらしめたり。義勝拔擢せられて君側に侍讀となり、藩學に教授たること四十餘年、獻替の任に當り、藩政を釐革し、姦邪を杜絶し、一藩の士風、爲に全く一新するに至れり。これ實に女史の力なり。

紀元二三九五。
紀元二三九八。

享保二十年春、中風症に罹り、元文三年病勢漸く進み、自ら起たざるを悟りければ、宗衍、義勝の二子を枕頭に招き、最後の訓誨を與へて曰く、

吾前に勞して後に樂しむは汝曹のあるを以てなり。幸甚

しといふべし。老いて死するは順事なり、又遺憾なし。汝等相輯睦して、決して相争ふなかれ。

と。斯く言ひつゝ、平然眠るが如くにして逝きぬ。享年七十九。辭世の詩に曰く、

一氣終時萬事休、
樂天委命又何憂。
子孫有孝能思我、
勤向聖賢書裏求。

學徳古今に秀でし女史はかくの如くにして逝きぬ。明治に入りて、香川縣教育會丸龜支部は碑を建て、その徳を頌し、文部省は模範人物として、その傳記を全國の女子師範學校、高等女學校に配付し、民間亦女史が筆蹟を敬重し、斷翰零墨と雖も襲藏して措かず。その流風遺韻今なほ灼然として我

が教育界を照せり。

貝原益軒嘗て女史の文を評して曰く、學富み才優り、古人の所謂筆海翻瀾、學山聳秀なるものなり。蓋し有智内親王（女史）以來の人か」と、山名政胤亦女史を評して曰く、古の所謂真正にして辭あり、柔順にして守あるは、それ斯の人にあらざらんや、それ斯の人にあらざらんや」と。學殖雙絶、加ふるに文辭の才を以てす、古今その儔罕なりといふべし。（井出豊作の文に據る）

二一 渡邊華山の立志

私＊十二歳の時、日本橋邊通行仕候節、忘れも仕らず、備前侯の御先供に當りて打擲を受け、子供ながらも大息仕

*文化五年。

候は、右備前侯も御歳は大體同年位にて、大衆を率ゐて御通行成され候事、天分とは申しながら、同じ人間なるにと、發憤に堪へず。今より何なりと志し候はゞ、如何なる儀にても出來申す



山 嶺 邊 渡

べくと存じ、其の頃、高橋文平と申す者御祐筆を勤め候が、私子供には候へども、合口にて候間、これに相談仕り、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成り申すべくと決心仕候。さりながら、私父二十年來の持病にて、一日も看病按摩仕らざる日はこれ無く、これ

を奉公同様に心得、母の手だすけ仕候。其の上、兄弟皆幼少にて、七人程もこれ有り、唯母の手一つにて、病父も私共も其の日を送り候事故、右様の餘裕もこれ無く、貧窮は筆紙の盡す所にはこれ無く候。これに依りて、弟共は



蹟 筆 山 嶺 邊 渡

寺へ奉公に遣し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣し候。一人の弟は私十四歳許の時、板橋まで生別に送り参り候時、雪はちら／＼降來り、弟は八九歳にて、見も

知らぬ荒男につれられ、後を振向きく、別れ候ひし事、今に目前に見ゆる如くに御座候。私母、近頃まで、夜中寝ね候に、蒲團夜著を引きかけ候を見及び申さず、やぶれ疊の上にごろ寝仕り、冬は炬燵にふせり申候。私父大病故、高料の藥種、藥禮、日々の麵類等に事かき、疊、建具の外、大抵質物を置きつくし、尙親類共にも借財し盡し、僅か南簾一片の儀にて、母方の身内の者の本所一つ目に住居致し候方へ、母事、助右衛門と申す弟を背負ひ、雪を冒して罷り越し、夜に入りて歸宅仕候。其の節、私跣足の湯を沸し候とて、衣服を焦し、大いに叱られ候儀、今に覺え罷りあり候。

これに依りて、尙高橋文平に相談仕候に、逆も、儒者に相成り候とて、金のとれ候儀はこれ無く、貧を救ふ道第一なりと申すにより、十六歳の時、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と申す畫工に入門仕候。然る處、貧人にて附届不行届なりとて、僅か二年にて、師家より斷を受け申候。私も此の時は如何仕るべきかと泣きしづみ候が、父の申候につきて、金陵^{*}の弟子と相成り候。金陵ことの外隣みて、教へくれ候間、少々は畫も出來候様に相成り候へども、半紙を調へ候手段これ無く、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、これにて紙筆を求め候。學問は仕りたく候へども、何分閑暇これ無く、冬に相成り候へば

*金子氏、江戸の畫家、文晁門人。
(一三四三)

谷氏、名高き畫家。(三四—三五)

朝七つ時に起出で、飯を焚き、其の焚火にて讀書仕候。右は文晁(二)など私を憐み、畫道取立てくれ候節、彼の人毎日拂曉に起きて畫を認め候話を承り、奮發致候儀にこれ有り候。

佐藤氏、徳川幕府の儒官。(三五六—三六三)

私二十六歳の正月元旦朋輩うちより候節、私申候は、上かくのごとき御困難なれば、各方も拙者も今より心がけ、御政道を佐け申すべしと契約致候。これに依りて一齋にも申し談じ、學問仕りたく候へども、寸暇もこれ無く、夜中にても參り申すべくと存じ、父より門限御猶豫の儀願ひ候處、聽届け難き旨の御沙汰につき、終に折角の志も挫け申候。つらく存じ候へば、上にして君に忠

下にして親に孝ならん事、皆學問の力により候。わけて御政道に與りて上に忠ならん事、無學にては協ひ難く候へば、愈、繪事を專とし、窮を救ひ、少しにても親に安堵せさせ申したしと、これよりは、一生御役儀相勤め候はんとは思ひ寄らず、急にしては家の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成り申すべき一事に思を定め申候。(渡邊崋山—崋山全集)

金言(七)

見賢思齊、見不賢内自省也。
富與貴、是人之所欲也、不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也、不以其道得之、不去也。

二三 雨の興

春は雨こそそのどかなれ。軒端より霞み渡りて、いと濃かに降れるが、衣濕せども降るとは見えぬ。軒の玉水も閒遠に音して、棲みすてし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面の枯生の床に緑や、そひゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、共にいとのだかなり。燈挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。そのほか、梅が香のしめり、夜深く匂ひわたるも、花にうしとかこちぬるあはれはありけり。

春も老いゆく頃、蛙の時得顔に鳴くもをかし。時鳥の初音い

年終月
四月廿五日

晴れぬころり



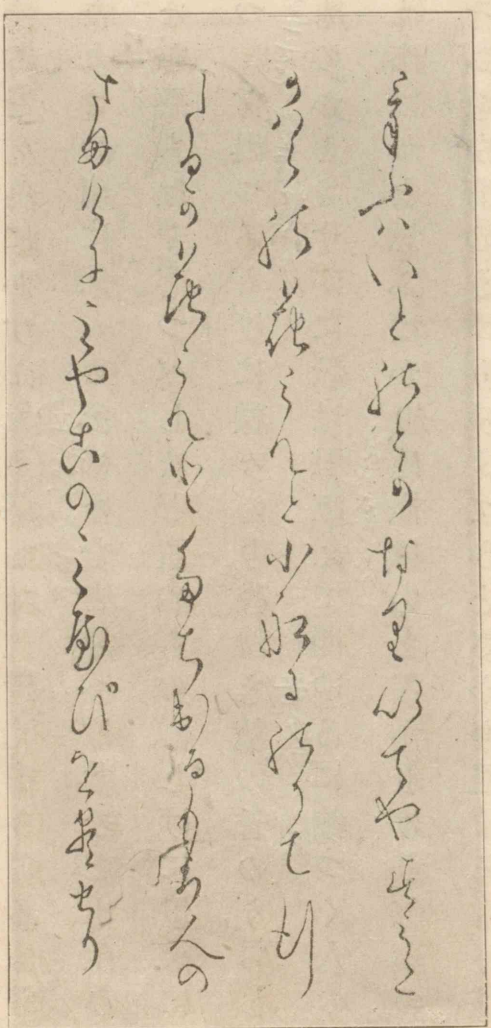
松平樂翁

かにと思ふ頃、村雨のはらくと降りいでたるも、五月雨のいく日もふり暮して、書の卷々くり返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風ひとしきり吹落ちたるに、柳蓮なんどの、葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きなかなる雨の閒遠に落ちたるが、後には頻に降りきて、物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。

軒端は玉の簾かけたらむやうに、玉水の絶間なく落ちたる

に、庭は一つ湖となりて、あるは瀧おとし又は水はしらせたるに、人々しばしものいはでうち守りゐたるもをかしや、雲淡くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出で、餌ひろふさまなり。はじめ雲立出でし方は、はや空の一しほ縁に見えて、虹なども見ゆるに、木々の緑の庭濼に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、かみの音に驚きてはひ出でたるが、けふのはわか、りし時のごと、よく霽れにけり、今時のはかく霽る、こと稀なり。などはや繰言いふもあり、彼はかくあわてし。などいひて、かたみに笑ひどよみつ、けふは蚊も少なかるべし、かみの音もいと幽かなり、此の頃の暑さも忘れぬ。とて、端近う出づれば、夕月の光さ

しわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の物待顔に空うちにらみて、ふつ、かなる音に鳴くもをかし。



松平樂翁筆蹟
(花月草紙自筆第一の部)

秋來る頃の雨はきのふにかはりて、何となう淋し。萩の上風、
外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞

馴れし笈の水の音までも、あはれふかくこそ。月の前の村雨も亦をかしまいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々もそめなむと思へば、葎なども生ひ出でなむ。栗もはや落つべしなど、童のもの淋しげに燈火に向ひつゝ、言出づるも、げに様々なり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲返えて聞ゆるに、鐘つく人の心をもあはれと思ふばかり、感慨はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつりゆきて、ひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきどし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲

きいてたるが、晝過ぐるまでも萎みかくれたる、またあはれなり。野分の風はおどろしきものから、雨は夕立におとらざれど、さすがにあはれをそふるは秋の習なるべし。時雨のさとおとして、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。(松平樂翁―花月草紙)

二三 百花譜

郊原一路満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色哀しみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲秋の恨を語る。馬の嘶く聲先づ聞え、小歌聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたるまゝにて、馬の自ら歩むは熟せる路にや。

機杼
布帛織造は、是れは、たのしみ
のこころである。又、机杼、機
を、織る、は、自ら、機杼、を
立、て、一、糸、を、一、糸、の、向、に、泥
ま、さ、す、と、北、風、に、一、糸、は、須
上、自、ら、機杼、を、ま、さ、す、一、糸、の、風
骨、を、成、す、と、一、糸、を、能、く
人、と、共、に、生、か、す、と、同、く、人、と、共、に、生、か、す、と

鴉飛びつくして四面寥廓たり。ふと顧みれば、招く尾花の末
に、一團の大月明かなり。
雀の聲滑かなる冬の日和、日かげ暖かに圓窓を射て、火鉢の
火も消えかゝれり。室淨うして點塵なし。床の間の俗氣なき
畫幅の下、水仙三つ四つ露を帯びたり。老人二人靜かに局に
對して子を下す聲、時に丁々として響く。
桃花數株茅屋を圍みて雞聲午なり。桔槔動かずして一犬門
外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲と共に洩來
る。
一泓の池水半ばこれ蓮花。白や紅や影を水に落して、水に花
あり。健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。水榭深く鎖して人籟な

小徑
二、三、の、羊、蹄、の、跡、も、小、徑、を
示、す、。

し。曉煙垂柳を罩めて、日未だ昇らず。
流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こなた
は小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を著け
たり。流鶯時に一聲、思ひがけずも、大輪の花ほとりと水に落
ちて、水暫くは文をなす。
村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。馬頭觀世音
の石像、頑として物いはず。側に生ひ出でたる幾莖の女郎花、
なよ／＼として風にもだゆ。
同伴なくて詩を思ひつゝ、たどる山路、到る處櫻花多し。春風
一陣、空に晴雪をちらし、地に綾の筵を敷く。
池畔の掛茶屋、少女欄に凭り、手をうちて鯉を呼ぶ。穉兒立ち

て麩を投ぐ。柵上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及ばんとす。
 麥浪に連なる一面の菜花。菜花や黄、麥浪や緑。滿地みな色あり。行人絶えて遊絲のどこにかゝり、一雙の胡蝶追逐し去つて行く處を知らず。

夏の日暑く、山路峻しく、喘ぎぐ上るに、渴を催して堪へ難き時、水音聞えていと嬉しく、荆莽を排して之に就けば、急湍清玉を迸らす。一掬二掬三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目を注げば、苔滑かなる巖の上に百合の花危げに立てり。折らんと欲して折るに忍びず、立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を含むが如し。

荆莽
 水音
 急湍
 清玉

洲邊
 蘆花
 雪を吹く

巨蟹
 泡を吐きつ

秋海棠
 群芳
 遊絲
 胡蝶

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き隄の上、往きかふ人なし。巨蟹這ひいで、泡を吐きつつ、螯を舉げて空を挟む。
 馬に食ません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸りゆく田舎少女、知りてか知らずてか、其の草の中に桔梗一枝まじれり。
 鸚鵡語りつくして日暮れんとす。人を待てども到らず。蕭々たる細雨、庭の秋海棠に灑ぐ。(大町桂月―春草秋草)

二四 櫻 詠

主人「これはこのあたりの者でござる。この頃はいづ方も花

の盛ぢやと申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに、参ることも得いたさぬ。最早、暇になつてござる程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼びだし、申しつけう。やいく、太郎冠者あるか。」

太郎冠者「はあ。アト「居たか。」シテ「お前に居ります。」

アト「汝を呼出すこと、別のことではない。この頃は方々の花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならんだ。最早、暇になつたほどに、花見に出でうと思ふが、何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。このごろは櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられるとあれば尤もでござる

が、珍しからぬ。はなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。」

アト「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じことぢや。」

シテ「これは頼うだ人とも覺えぬことを仰せらるゝ。左様に仰せられたらば、人中で恥をかゝせられる、身どもは苦しうござらぬが。」

アト「して、汝がその様にいふは仔細があるか。」

シテ「なか／＼仔細こそござれ、はなが見させられたくば、私が「はな」を見させられい。他所へござるまでもござらぬ。」

アト「いや、おのれは言語道斷のことをいひ居る。おのれが面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。」

シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、

「はな」とは詠まれませぬ。」

アト「なかくくでもないことをいひ居る。その歌を詠うで聞かせい。」

シテ「詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。」

アト「急いで詠め。」

シテ「心得ました。櫻散る木の下蔭は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける。これは何と。」

アト「此方にも花といふ歌がある。」

シテ「さらば詠うで聞かせられい。」

アト「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじならまし。」

拾遺集、紀貫之。

平忠度の歌。

新古今集、後鳥羽院御製。

同上、僧西行。

シテ「この方にもまだござる。櫻さく遠山どりのしだり尾のながくし日もあかぬ色かな。」

アト「それなら此方にもある。吉野山去年のしをりの道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねむ。」

シテ「それなれば此方には謠にござる。」

アト「謠へ、聽かう。」

ウシテ「櫻かざしの袖ふれて。」

アト「一段の謠謠ふ、致し様がござる。やい太郎冠者。ウタヒ「花見車暮るゝより、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ。」

シテ「はあこれでつまりました。」

アト「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて、

(五) 今はさながら花も雪も、皆白雲の上人、櫻かざしの袖ふれて、花見車暮るゝより、月の花よ待たうよ。(謠曲、小鹽)

某と競合ひ居る。彼方へうせい。」

シテ「はあ。」アト「えい。」シテ「はあ。」（續狂言記に據る）

金言（八）

子夏曰、小人過也必文。

過而不改、是謂過矣。

二五 四季の月

梅咲く園にかすみつゝ、

曇りもはてぬ朧夜の

まだしきほどの杜鵑

初音待つ夜の枕より、
峯のさくらの花ぐもり、
月こそ春のひかりなれ。

（一）
てりもせずくも
りもはてぬ春の
夜の朧月夜にし
くものぞなき。
（新古今集、大江
千里）
（二）
さつき來ばなき
もふりなむ、杜
鵑まだしき程の
聲を聞かばや。
（古今集、伊勢）

なれて涼しき月かげに、 閨の戸さゝであかすなり。

桐の葉わけに影見えて 秋とほのめく夕より

立待ち居待ち待ちとりて、 幾夜か月を眺めけむ。

木の葉ふりしく山の端の 時雨にくもりしもに近え、

雪にてりそふ月かげを などすすさまじと思ふべき。

（石川依平）

二六 熊王の發心

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正

正平七年。(1011)

儀に度々はかられけるを、くちをししく思ひこめて過しけるに、去んぬる住吉の戦に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我がためにも親の敵にて候へば、いかにもして討ち侍らむ。河内へこえて正儀に仕へ侍らむに、幼く候へば、などか心をゆるし申さぬことのあるべき。たとひ心をゆるすこと、侍らずとも、七とせ八とせほども仕へ候はゞ、そのうちには討ちぬべき。たよりのいかで無からむ。御暇をこそ賜はらめ。」と涙を流せば、光範もいとあはれに思ひながら、幼ければ敵の國へやらむも心もとなし。又は命にかはりて討たれし者の子なれば、形見とも思ふべければ、と強ひてとゞ

攝津國東城郡。

め給ひけれども、少し大人しくなりなば、よも近づけ給はじ。幼くありなむ時参りてこそ。と頻に望みければ、力及び給はで、常に身をはなち給はざりし刀を賜ひて、これにて本意とげよ。とて、阿部野まで人あまた添へてやられけるに、それよりは我にひとしき童一人を具して、赤阪の城に行きて、そのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらむ。」と尋ねけるに、「われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひける者の小子に、熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は去んぬる時、住吉の戦に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追討ちて領地を奪ひ候へども、光範と力を合せ候へば、せむ方なくて、いかなる寺

へも入り侍りて僧法師にもなり、父の跡を弔ひ候はむがため、にさすらへ侍り。といひけるを、あはれと聞きて、まづ我方に伴ひてさまゝいたはりて、後に、正儀にありつる事を語りて、幼くは候へど心のさかくしくて、など申すに、あはれがり給ひて召寄せ給へり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思ひつきて親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕しにけり。十五ほどになりければ、河内の國にて少しなるところをとらせむ。といひけれども、いかで恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。とて辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりにあたりけるに思ひつけて、今宵正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らむ。と思ひ立ちてありけるに、その日お前に召して、けふ吉日にてあるなれば、元服せよかし。とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせたる鎧を賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正儀の御前にありけるが、またふと思ひ出で、討ち奉らむならば今宵こそ。と思ひて、膝をおし直して正儀に目をかくれば、年頃的情深かりしこと、今日の元服の事など思ひ續けて、いかで情なくうち奉らむ。と思ひかへして、心を鎮むれば、父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば。と思ひ定めけれども、何心もなく渡らせたまふありさまを見ければ、御いたは

しくて堪へかねけるにや、廣縁に出で、聲をあげて泣叫ぶを、人々も正儀もおぼつかなく思ひ給うて、障子を開き見たまへるに、伏ししづめるさまのたゞには見えずありければ、「いかに。」と問はせ給ひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために自ら死なむより外は候はず。」とて、刀を取りなほせば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら、「いかでさはあらむ。」と、とりつきてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて髻おしきり、往生院にて形をかへ、君より賜はせたる名なればとて、正寛法師とぞいひける。

河内國南河内郡池島村。楠木氏の石塔あり。

寺の傍に草の庵をむすびて、若しも心のかはることのあり

もやせむ。」とて往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありしありさまをくはしく書きそへてかへしけりとかや。いとあはれなりける事にこそ。
(隠士松翁、吉野拾遺物語)

二七 武士のなさけ

日本の武士は、文武二道にかけて嗜があるのを最上の理想とした。上代の荒魂和魂の思想は、即ちこれである。すべて物のあはれを知ることが本當の武士である。義理といひ、慈悲といふのがこの精神である。熊合直實が、
取つておさへて首をかゝんとて、内甲をおし仰のけて見

平家物語の文。

たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡して、十六七ばかんなるが、容貌まことに美麗なり。

これを見て敦盛をゆるさうとしたのが其の本色である。それも出來難かつた爲に、無常を悟つて法然上人の弟子となつたことが、武士として如何にも優にやさしい事と感心するのである。吉野拾遺の、楠木正行が辨内侍を亂暴人の手から奪ひ返した話、しかも其の女を賜はるといふ勅命があつた時、^{三〇}とても世にながらふべくもあらぬ身の、^{三一}この歌を詠じてこれを辭したといふことは、その行爲、その文雅、武士の標本といふべきものである。仇敵までもなつくといふのが眞の武士で、同じく吉野拾遺

^{三〇}名は源空。淨土
専念宗の始祖。

^{三一}とても世になが
らふべくもあら
ぬ身の、かりの
契をいかで結ば
む。

の熊王が、正儀を仇とねらつて、遂にその高義に感じて討ちえなかつたといふ話は、安倍宗任が義家に降つて、遂に感化されたといふ話と同一轍である。武士は敵をもなつけるといふなさけが無ければならぬ。武士は主君に對しての眞心と同時に、敵に對してのなさけを持たねばならぬ。楠木正行が瓜生野の戦に、敵の溺卒五百餘人を助けて、醫藥を給して勞はつた事がある。これは日本に於ける赤十字事業として著しいものである。はじめ日本が赤十字社に加入しようとした時は、外人は例の通、日本を野蠻視して居つたから、日本にも昔から赤十字の様な事業をやつた事があるかと問合せに來た。其の時、この例を以て答へたので、これがために赤

鎮守府將軍平繁
盛の孫にして貞
盛の養子。
平維茂の通稱。

駒澤治郎左衛門
岩代多喜太。

十字社の加入が出来たといふ事である。日清・北清・日露等の
事件に、日本赤十字社の爲した事業は著明な事實であつて、
今では西洋諸國でも、日本の赤十字社の目ざましい活動を
認めて居るが、日本人には古くからこの考があつたのであ
る。今昔物語の「平維茂罰藤原師任話」に、餘五將軍が、
屋共に火皆つけて、凡そ女をば上下手な懸ける。男と云は
ん者をば、見えんに隨つて射臥せよ。
といつた話があるが、之を以ても、女子の様な抵抗力の無い
ものには全く武力を加へぬといふ、武士のなさけが見える。
朝顔日記の駒澤は武士の標本であつて、岩代は似而非武士
の代表者である。

君子之於禽獸
也、見其生、不
忍見其死、聞
其聲、不忍食
其肉、是以君子
遠庖廚。(孟子)

日本人は、上代には山の幸で兎や鹿の肉、いはゆる毛の荒物
を食用にした事はあるけれども、家畜の肉を食つた事は無
かつた。後世になつて、佛教の影響から全く肉食を禁じて以
來は、尙更の事である。自分の家に飼つたものを殺して食ふ
ことは、日本人の忍びぬ所である。今日でも、自分の家の雞を
しめ殺して心持よく食ふ人は至つて少ないと思ふ。鰻屋の
主人が目を病むとか、鳥屋の息子が鳥肌に生れたとかいふ
やうな話は、強ち佛教からの迷信ではない、日本人の本性か
ら來た話である。日本に牧畜業の發達せぬのもこれが爲で
ある。此の仁慈心は理窟から言へば論にはならぬが、そこが
人のなさけである。君子遠庖廚といふ語もこの事である。惻

窮鳥入懐、仁人
所憫。(頼氏家
訓)

(=)1863.

手紙
一
サ
知
子
郷
苦
に

隱之^{アリスミ}心仁之^{ハカレ}端也。とも孟子はいつて居る。窮鳥^{シヨウニ}懐に入れば、獵夫もこれを殺さず。といふのも支那の語ではあるが、事實は日本に弘く行はれて居る。近頃は動物虐待防止會といふものが出来て、動物に慈悲を施すことを主唱して居る。これも西洋文明國からの風潮で、奴隸制度を廢したのも、つい近頃であるが、段々と其の徳が禽獸にも及んで來たのである。西洋はいさ知らず、日本では昔から禽獸に對して毫も虐待をした例證はない。農夫が牛や馬をいたはる事は一通でない。軍馬に徵發された馬に對して、涙をのんで別れた話はいくらかも聞いた。鹽原多助の實例は現在いくらかもあるのである。

源平盛衰記の文。

畠山は赤緘の鎧に護田鳥毛の矢負ひ、三日月といふ栗毛の太く逞しきに乗つたりけり。此の馬鞭打に三日月程なる月影のありければ、名を得たり。壇の上にて馬より下り、さしのぞいて申しけるは、爰は大事の惡所、馬轉してはあしかるべし。親にかゝる時、子にかゝる折、といふことあり。今日は馬をいたはらむ。とて、手綱、腹帶より合せて、七寸に餘りて、大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上に搔負ひて、椎の木ツツキのすたち一本ねぢ切り、杖につき、岩の道をしづくとこそ下りけれ。中畧、畠山は此の崖岩に馬損じては不便なり。日比は汝にかゝりき。今日は汝をはぐまむ。といひける、情深しと覺えたり。

武士のなさは馬にも及ぶのである。神前の馬はいふに及ばず、八幡の鳩、稻荷の狐、（三）山王の猿、春日の鹿。天地自然に親しむ我が國民は、禽獸を愛しこそすれ、決して虐待はせぬのである。（芳賀矢一—國民性十論）

（四）金言（九）

曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。

子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所

不欲、勿施於人。

二八 如意輪堂

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせ

正平二年（1109）

門人曰何謂哉
（三）
（四）
（五）
（六）

（三）楠木正行

き落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を温め、藥を與へて創を療ぜしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に騎る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながら、その情を感じずる人は、今日より後心を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、臆て彼の手に屬して四條繩手の合戦に討死をぞしける。さても今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多くの敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵

（三）河内國北河内郡
（四）譽田林の戦及び
（五）阿部野の戦
（六）足利尊氏
足利直義

延元元年五月十七日

延元元年五月十七日

衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國の催勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀、八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて十二月二十七日芳野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、（弱）庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所かねて思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にて討死仕候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひ

鎮守社壇回祿事、殊以驚歎入候。但神體不_レ燒失。火中御坐候條、末代之奇瑞、言語道斷候。念可_レ經_二奏聞_一候。恐々謹言。

五月廿六日
正行華押
觀心寺々僧
御中

鎮守社壇回祿事仕
終_レ入_レ仕_レ祿_レ不_レ燒
失_レ火中御坐候
條、末代之奇瑞、
言語道斷候。念
可_レ經_二奏聞_一候。
恐々謹言。

五月廿六日
正行華押
觀心寺々僧
御中

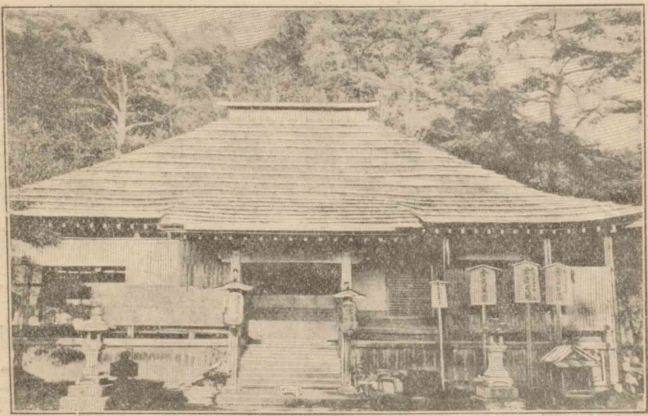
楠 正 行 筆 蹟 (史 徵 墨 寶)

しを、合戦の場へは
伴はで、河内へ歸し、
『死に残り候はんず
る一族を扶持し、朝
敵を亡ぼし、君を御
代に即けまゐらせ
よ。』と申し置きて死
にて候。しかるに正
行、正時已に壯年に
及び候ひぬ。この度
我と手を碎き合戦

*後村上天皇。

仕候はずば、かつは亡父の申し、遺言に違ひ、かつは武略の
いひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ
習にて、病に犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不
忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今
度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕りて、彼等が頭を
正行が手に懸けて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ
候か、其の二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生
にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕りて候。と申
しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心其の氣色に顯れけれ
ば、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣ちくえの袖をぞ濡しける。
主上みけみ乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔特に麗しく、諸卒

を照臨ありて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つこと



如意輪堂

を得て敵軍の氣を屈せしむ。叡慮
まづ憤を慰する條、累代の武功返
すも神妙なり。大敵、今、勢を盡
して向ふなれば、今度の合戦天下
の安否たるべし。進退度に當り、變
化機に應ずる事は、勇士の心とす
る所なれば、今度の合戦、命を下す
べきにあらずといへども、進むべ
きを知つて進むは時を失はざら
んが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせんが爲なり。

後醍醐天皇。

瑞雲修

朕汝を以て股肱とす、慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地に著けて、とかくの勅答に及ばず、只これを最期の參内なりと思ひ定めて退出す。
正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に書連ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓、

なき數に在る名をぞとむむる。

と、一首の歌を書きとゞめ、逆修の爲と覺しくて、各、鬢髮を切

りて佛殿に投入れ、其の日芳野を打出で、敵陣へぞ向ひける。(太平記)

二九 讀書

常に良き著述に親しむものは、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり、失意にも慰み、不平・憂悶もこれを忘る。書は少年の滋味にして老年の娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。外に出でたる時も邪魔とはならず。家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴。と羅馬の名士シセロの言ひたるも同じ心なり。されどかくの如きは人の讀書より

(二) Cicero.
(B.C.106—43)

受くる最大の利益にはあらず。

諺に、「百聞一見に如かず」といへるは何事もその身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限あれば、七十八十迄生きたりとも、目に視、耳に聽く事は幾何もあるべからず。我が日本國內の山水、風俗だけにて、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、且つ少なかるべきは言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て、これに親しまんことを願ふな

* Lan bique.

葡萄牙語。

れ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた、凡そ三千年間に出てたる大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又はランビキランビキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡望遠鏡に譬ふるも可なり。もとより人工に成りたるものなれども、人をして、肉眼にて看得ざる微なるものをも、遠く且つ大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして、良書の助を借ることなく、只その貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑さへ、正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに書は知識の寶庫にして、かねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尙これに盡きたるにあらず。

女子國文教科書卷七

(一) Petrarca.
(1304—1374)

(二) Channing.
(1780—1842)

(三) Milton.
(1608—1674)

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、「予に良友あり、彼等は皆名士、大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若しその助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と、これ良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも曰く、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑吾人に對ひて語り、その最も貴き思想を吾人に與へ、且つその心靈を吾人の爲に吐露す。」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は、保存、踏襲して後世に傳へられたる、俊傑が貴重なる生血なり。」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如きものあるか。」と歎ずるなり。若しかりそめにも、その偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書を用極まれ、るにちかしといふべし。(坪内逍遙—中學修身訓)

三〇 能損の道

人皆得んことを思ふ。得るは益の道なり。得ることを思ふもよし。善を益し、徳を益す、よからざること無し。されど失はん

益善の録あり
抑横也

益の道を取るを得るに至るべきなり。此の理を解せずして、益の道を取るを得ざるに苦しみ、モカヤ焦慮煩悶するは甚だ愚かなり。

盆中の樹は、能く損の道を盡すによつて其の壽も長く、其の勢も盛なるを得。通達窮通は命なり。人は時に思ふに任せざる境に在らざる能はざる時あり。さる時は、益の道は能く盡し難し、たゞ損の道を取りて幾時を經べし。日月廻轉、又おのづからにして、益の道を盡し得るの機會にも臨むものなり。今の人、輒もすれば益の道の可なるを知つて、損の道の妙を知らず。一たび益の道を取る能はざるの時に當れば、焦燥懊惱する者多し、これ表裏といふ事を考へず、左右といふ事を

思はざるものなり。吐く息を多くせよ、入る息は自ら多からん。損の道を思ひ得て徹せば、益の道も脚下にあらんなり。

(幸田露伴一洗心録)

金言(一〇)

君子求諸己、小人求諸人。

子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。

君子
徳者
官位

文 部 省 檢 定 濟

大 正 六 年 一 月 十 三 日 高 等 女 學 校 國 語 教 科 書

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候は、直に御送附可致候



大正六年一月十七日	大正五年十一月廿八日	大正五年十月廿五日	大正五年三月八日	明治四十五年三月十五日	明治四十四年十二月廿五日
修正六版發行	修正五版發行	修正五版發行	修正四版發行	修正四版發行	修正三版發行
東京市小石川區大塚窪町八番地	東京市神田區裏神保町六番地	東京市神田區裏神保町六番地	東京市神田區裏神保町六番地	東京市神田區裏神保町六番地	東京市神田區裏神保町六番地

編者

佐々政一

發行者

上原才一郎

發行所

光風館書店

印刷者

四海民藏

東京市神田區裏神保町六番地

(電話本局二千三十九番
振替口座東京三二七番)

定價各金三十拾錢
臨時定價各金三十拾二錢

女子國文教科書全八冊

東京秀英會一工場印刷

女子國文教科書卷七

一八

女子國文教科書修正六版卷七終



